山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第106集

山梨県古代官衙・寺院跡詳細分布調査報告書

1995.3

山梨県教育委員会

山梨県古代官衙・寺院跡詳細分布調査報告書

角

1995.3

序　文

本調査は文部省から補助金を受けて、1990年度から1994年度までの5年間にわたり、山梨県内の古代官衙および古代寺院を調査した報告であります。補助金の事業名は『古代官衙・寺院跡詳細分布調査』で、主として古墳時代後期から平安時代までの官衙および仏教関係の遺跡の分布調査を行いました。

山梨県における古代の官衙や寺院遺跡について考古学的な視点をもって論じたのは、『甲斐国志』の次のような記述にはじまりましょう。「寺後ニ殿堂ノ石礎アリ庫裏ノ前ナル礎ハ七層塔ノ旧址ナリト云フ、大サ皆ナ五六尺許リ古瓦欠折シテ多ク存セリ、（中略）経塚・町屋ナド云フ処モ古ヘノ寺境ナランカ凡そ方十町ニ余レリ、按ズルニ延喜式ニ甲斐国分寺料二万束ト見エタリ」つまり、江戸時代にすでに国分寺の比定がなされ、早くも1913年には史跡として指定を受けているのであります。その後、大場磐雄氏による寺本廃寺の性格についての「国分尼寺（法華寺）説」否定、郡寺あるいは氏寺説の提示、1949年の中島正行氏による川田瓦窯跡の発見、1950年の石田茂作氏による寺本廃寺の調査など着々と研究が進められてきました。また、近年は春日居町の国府周辺の調査や、甲府市の桜井畑遺跡や韮崎市の宮ノ前第2遺跡の小規模な寺院跡、さらに甲府市東畑遺跡出土の小金銅仏像や敷島町の銅製小仏像など重要な発見が相次いでいます。このような時に官衙・寺院関連の遺跡の集大成を行うのは、まさに時宜を得たものと言えましょう。

今回の『古代官衙・寺院跡詳細分布調査』では、既知の遺跡を含めて官衙および寺院の悉皆調査を行い、遺構・遺物の確認を行う目的で実施しました。官衙遺跡については、御坂町国衙遺跡の推定地の一端の横畑遺跡の試掘調査を行いました。国衙関連の遺構はみつかりませんでしたが、当時の役人が使用した石製の帯飾りの破片を発見しました。この遺跡へのさらなる調査が期待されます。

寺院遺跡の試掘では、一宮町大積寺跡から布目瓦や土師器が出土し、伝承寺院が確認されました。境川村温湯遺跡からは布目瓦が出土し、かつて山岳寺院があったことが推定されました。塩山市放光寺でも布目瓦が出土し、真言宗寺院の寺伝がほぼ確認されました。春日居町長谷寺からも布目瓦が発見されました。瑜伽寺では、石列遺構を確認し、唐草文が施された軒平瓦が出土しました。また、官衙跡か寺院跡かの性格は明らかではありませんが、御坂町半行寺遺跡では、布目瓦と墨書土器などを含めて大量の土師器・須恵器が出土しました。これら遺跡の保護と綿密な調査が望まれます。

今回の分布調査によって、本県の官衙遺跡や仏教関連遺跡のあり方の一端が把握できたものと思われますが、このほかにもまだまだ多くの官衙遺跡・仏教関連遺跡が地中に眠っているものと思われます。本書を官衙・仏教関連遺跡の基礎資料としてご利用いただくとともに、さらに充実した内容になりますように、今後ともご尽力をお願いする次第です。末筆ながら、本調査にご協力いただいた市町村教育委員会、寺院の住職、遺跡の地権者、直接作業に当たられた方々に厚く御礼申し上げます。

1995年3月

山梨県埋蔵文化財センター
所長　大塚初重

例　言

1．本報告書は、文部省の補助金を受けて、1990年度、1991年度、1992年度、1993年度、1994年度の5年計画で実施した『古代官衙・寺院跡詳細分布調査』の報告書である。

2．本報告書は第Ⅰ・Ⅳ章は末木　健が、第Ⅱ章1～3を高野玄明が、第Ⅱ章4～6を野代幸和が、第Ⅱ章7～9・11と第Ⅲ章を村石眞澄が、第Ⅱ章10を大谷満水がそれぞれ執筆し、村石眞澄が編集した。

3．写真撮影は報告執筆者がそれぞれ撮影した。甲府市東畑遺跡B地点出土の小金銅仏写真は甲府市教育委員会より借用した。敷島町松ノ尾遺跡出土の阿弥陀如来坐像写真は敷島町教育委員会より提供を受けた。

4．調査の採集品・出土品・写真・図面は、山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

5．調査参加者は次のとおりである。

調査員：平　重蔵、大村昭三

作業員：出月満す江、出月遊亀子、宇野和子、大嶋かね代、長田可祝、長田和子、久保田明義、越石　力、小林よ志子、佐藤喜久代、佐藤和美、塩島冨美子、平　美与枝、土屋ふじ子、内藤安雄、中込幹一、中込よしミ、内藤由紀子、中込星子、平川涼子、平山澄子、平山玲子、福井花子、福田三郎、古屋和喜子、宮坂晴幸、望月芳郎、矢崎米子

6．調査にあたって、次の組織や方々に御指導及び協力を戴いた。記して謝意を表したい。

明野村教育委員会、同佐野　隆、一宮町教育委員会、同猪股喜彦・瀬田正明、岩間　昇、塩山市教育委員会、同飯島　泉、円楽寺住職北守順真、岡　正明、柿島継男、春日居町教育委員会、同内田祐一、勝沼町教育委員会、同室伏　徹、窪田幸男、甲府市教育委員会、同敦野雅彦・信藤裕仁、国立歴史民俗博物館平川　南、境川村教育委員会、敷島町教育委員会、同大嶌正之、大善寺住職井上哲秀、長谷寺住職（故）黒川桂應、帝京大学山梨文化財研究所、同樹原功一、常滑市民俗資料館中野晴久、中川梅雄、中道町教育委員会、同林部　光、野沢昌康、韮崎市教育委員会、同山下孝司、放光寺住職清雲俊元、文化庁記念物課、御坂町教育委員会、同望月和幸・金井京子、八代町教育委員会、同伊藤修二・西名博恵、瑜伽寺住職竹川円應、山下　営、山梨市教育委員会、同三澤達也、（順不同・敬称略）

凡　例

1．第Ⅱ章にて掲載した遺跡位置図は、すべて国土地理院発行の5万分の1地形図を用い、上を真北方向とした。

2．第Ⅱ章の調査に関連した文献は、第Ⅲ章2．古代官衙・寺院跡一覧にまとめて示した。

目　次

巻頭図版（瑜伽寺出土軒平瓦、半行寺遺跡出土墨書土器）
序文
例言・凡例
第Ⅰ章　調査経過 …… 1
　1．調査目的 …… 1
　2．調査方法 …… 1
　3．調査組織 …… 1
第Ⅱ章　古代官衙・寺院跡試掘調査 …… 2
　1．長谷寺 …… 2
　2．大積寺跡 …… 6
　3．放光寺 …… 9
　4．温湯遺跡 …… 12
　5．瑜伽寺 …… 16
　6．七日子廃寺 …… 20
　7．大善寺遺跡 …… 21
　8．心経寺横手遺跡 …… 23
　9．半行寺遺跡 …… 24
　10．円楽寺遺跡 …… 28
　11．横畑遺跡 …… 30
第Ⅲ章　古代官衙・寺院跡分布・文献調査 …… 35
　1．主要古代官衙・寺院跡 …… 35
　2．古代官衙・寺院跡一覧 …… 40
第Ⅳ章　結語 …… 47
抄録 …… 49

半行寺遺跡出土墨書土器

第Ⅰ章　調査経過

1．調査目的

古代の山梨県は甲斐国と呼ばれ、奈良時代以前には仏教文化が伝来したことが明らかとなっている。県下の古代寺院として寺本廃寺・国分寺・国分尼寺はあまりに有名であるが、このほか布目瓦の散布地や、瓦窯跡、「寺」と書かれた墨書土器、金銅製仏像出土地など小規模な寺院や山岳寺院にまつわる遺跡は各地で知られている。また、律令制度の始まりは行政組織の確立をもたらし、国の役所の下に評（郡）や里（郷）の役所が置かれることになったが、古代に造られた役所施設や寺院は、今日、既に多くが消失し、文献は言うに及ばず伝承さえも伝えられていないものが多い。

近年の開発の波の中では、たまたま遺跡として残っていたものまで、人知れず消失してしまう可能性がある。そこで、文部省の補助金を得て、古代寺院と官衙の所在地調査を５年計画で実施する計画をたて、1990年度から1994年度まで、県内をくまなく調査した。調査は所在地の確定を最終的な目標としたが、古代の官衙・寺院とその推定地をも含め、集成する事を目的とした。したがって、伝承だけで取り上げて一覧表としている部分もある。

2．調査方法

初年度は文献のリストアップを行い、リストに基づき現地踏査を実施した。文献は『甲斐国志』・『甲斐国社記・寺記』を基本文献とし、布目瓦出土地のリストや国府推定地リストなどを作成し、これを基に現地調査を行った。現地調査は、原則として職員・調査員・作業員の踏査による分布調査を基本としている。なお、現地調査では寺社関係者や周辺の住民からの聞き取り、即ち、地域伝承や出土遺物などについての調査も行った。

初年度の成果に基づき、遺跡の確認の可能性が高い箇所を選定し、市町村教育委員会の協力を得ながら地権者と交渉して試掘調査を実施した。試掘調査は、遺跡の密度の濃い部分を選ぶようにしたが、土地の上物の状況により必ずしも良い条件が整ったわけではない。試掘はトレンチ調査によって行い、記録作成のうえ再び埋め戻し作業を行って地権者に返却した。

２年次～５年次の間に11カ所の試掘を行い多くの成果を得たが、その内容は本書の報告のとおりである。

3．調査組織

調査主体	山梨県教育委員会	教育長	川手千興（1990年度）
		〃	飯室淳雄（1991～1992年度）
		〃	加藤正明（1993～1994年度）
調査機関	山梨県埋蔵文化財センター	所長	磯貝正義（1990～1992年度）
		〃	大塚初重（1993～1994年度）
調査担当者	山梨県埋蔵文化財センター	主査・文化財主事	末木　健（1990～1992年度）
		副主幹・文化財主事	〃　（1993年度）
		文化財主事	早川典孝（1990年度）
		文化財主事	高野玄明（1991年度）
		文化財主事	野代幸和（1992年度）
		文化財主事	村石眞澄（1993～1994年度）
		副主査・文化財主事	大谷満水（1994年度）

作業員（分布・試掘調査・整理作業）

例言中に記載

調査協力者

例言中に記載

第Ⅱ章　古代官衙・寺院跡の試掘調査

1．長谷寺（ちょうこくじ）

所在地　東山梨郡春日居町鎮目字菩提
時　代　平安時代～中世
遺　構　堂跡
遺　物　布目瓦（平・丸瓦）、土師器（坏・甕）、
　　灰釉陶器、常滑、瀬戸、渥美

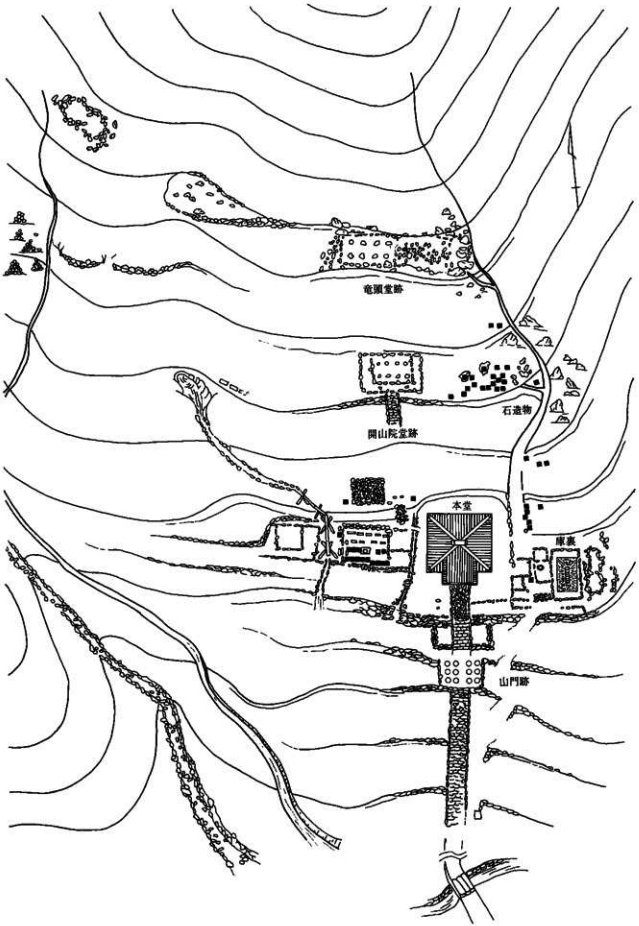
第１図　長谷寺位置図

中尾山中腹に位置し、標高約500ｍを測る。長谷寺は、『寺記』や『甲斐国志』によると、奈良時代養老６年（722）に僧行基によって創建されたとしている。現在は、本堂、石造物を遺すだけであるが、町指定史跡となっている（第２図）。今回は、発掘調査を承諾して下さった、長谷寺住職黒川桂應氏による長谷寺寺域の案内などをもとに、試掘調査を行った。その結果、長谷寺裏山に存在する２カ所の旧堂跡の調査、五輪塔集中箇所、テラス部分、長谷寺境内等にトレンチによる試掘及び清掃等を行った。堂跡の調査では、本堂北側60ｍ程登った山中に、開山院と呼ばれる堂跡がある（第３図）。雑木部分の伐採及び腐植土の除去を行った後、礎石の確認を行った。礎石は２間×３間の堂跡であることが確認された。さらに、50ｍ程登った所に竜頭と呼ばれる堂跡があり（第４図）、礎石を検出したところ、やはり２間×３間の堂跡であることが確認された。竜頭堂東側部分には遺物の分布が認められた。五輪塔群の調査では、五輪塔下の平石の除去を行い、下部に遺構は確認されなかったが、土師質土器などが数点出土している。境内のトレンチでは、１点ではあるが布目瓦や、土師器坏、甕の破片が出土している。

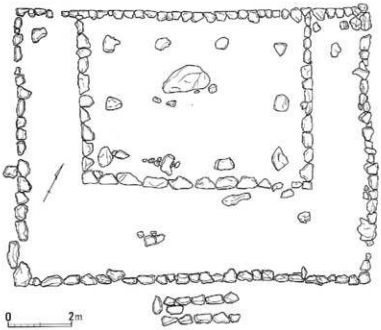
出土した遺物は（第５図）、１～３は土師質土器、４は須恵器（？）、５～９・１３は常滑で、そのうち５・８と６・１３は同一個体と思われる。１０は猿投の灰釉、１１は瀬戸、１２が渥美、１４は布目瓦（平瓦）、１５は丸瓦（玉縁部分）である。１～１３の時期はいずれも１２世紀末～１３世紀末に位置づけられる。

境内調査風景

第２トレンチ

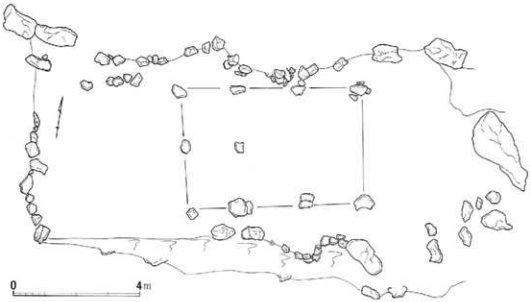


第2図　長谷寺概念図



第 3 図　開山院堂跡

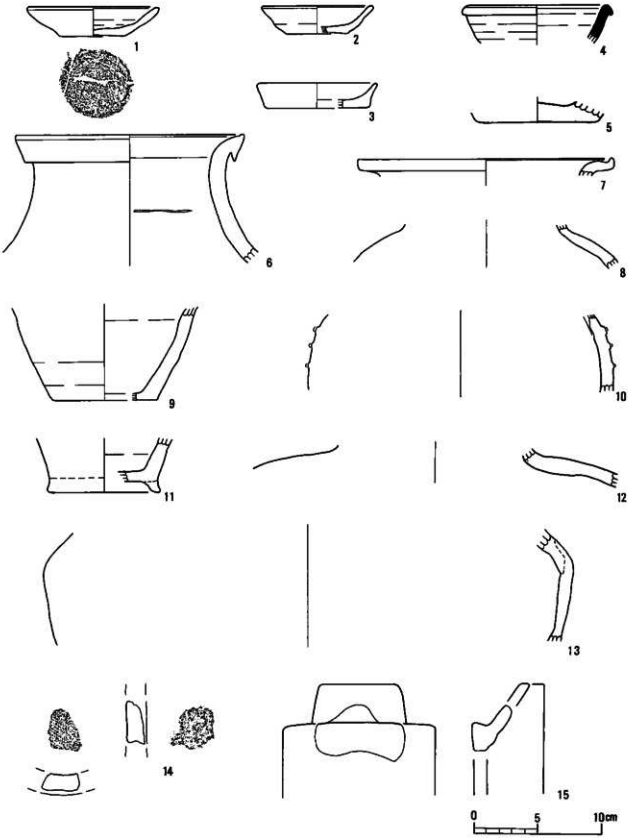
開山院堂跡



第 4 図　竜頭堂跡

竜頭堂跡作業風景

竜頭堂跡



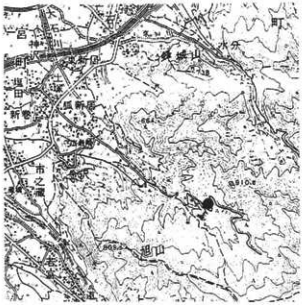
竈頭（4～13）方形石組（1） 第1トレンチ（15） 第2トレンチ（3、14） 第3トレンチ（2）

第5図 長谷寺出土遺物

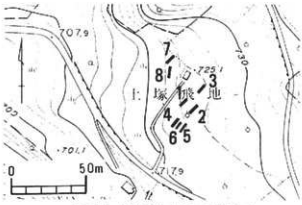
2．大積寺跡（たいしゃくじ）

所在地　東八代郡一宮町土塚字大積寺
時　代　平安時代～中世
遺　構　溝２条
遺　物　布目瓦（軒平瓦・平瓦・丸瓦）、土師器、須恵器

大石川に沿う大積寺林道沿い標高約720ｍ付近に位置する。大積寺は、古くから布目瓦が散布していることで知られる。残された記録は見られず、現在は荒蕪地となっている。調査は、寺院境内と言われている場所に試掘トレンチ８本を設定し、調査を行った。遺物は、第１・３・７トレンチからの出土が目立った。特に第１トレンチは、黒色土中に焼土・カーボンに混じって、多量の土師器や布目瓦などが出土しているが、遺構に伴うものなのかは、判断できなかった。遺構は、第５トレンチから溝が２条検出されたのみであり、寺院跡に関連する遺構については検出できなかった。出土した遺物は、出土土器第８図、布目瓦など第９図に示したとおりである。第８図1～30・32は土師質土器。31・33は須恵器。第９図１～３・５は平瓦、４は丸瓦、６は珠文帯をもつ軒平瓦で９世紀後半以降に位置付けられる。７～９はフイゴの羽口である。



第６図　大積寺跡位置図

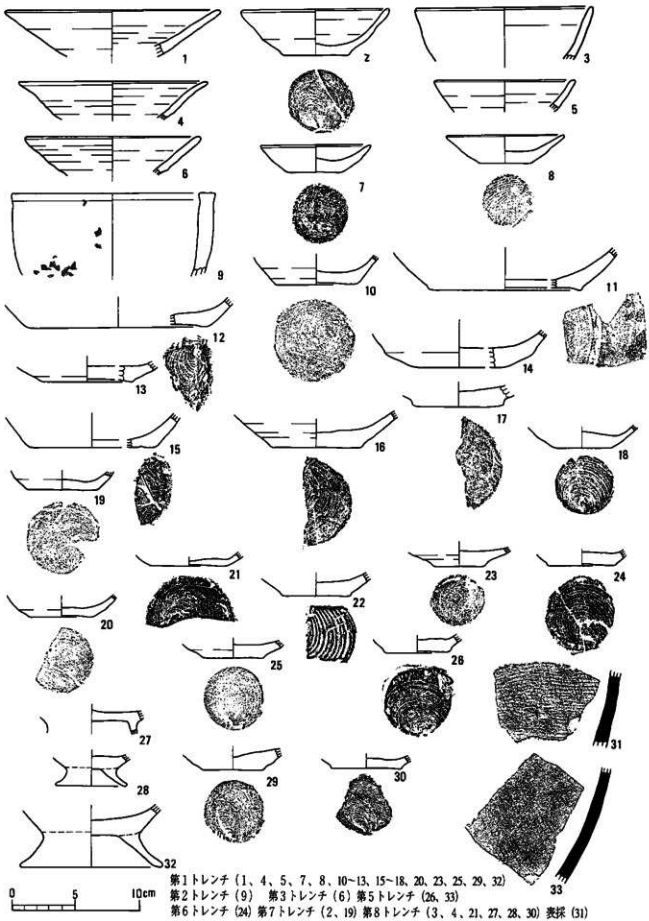


第７図　大積寺跡トレンチ設定図

大積寺跡近景

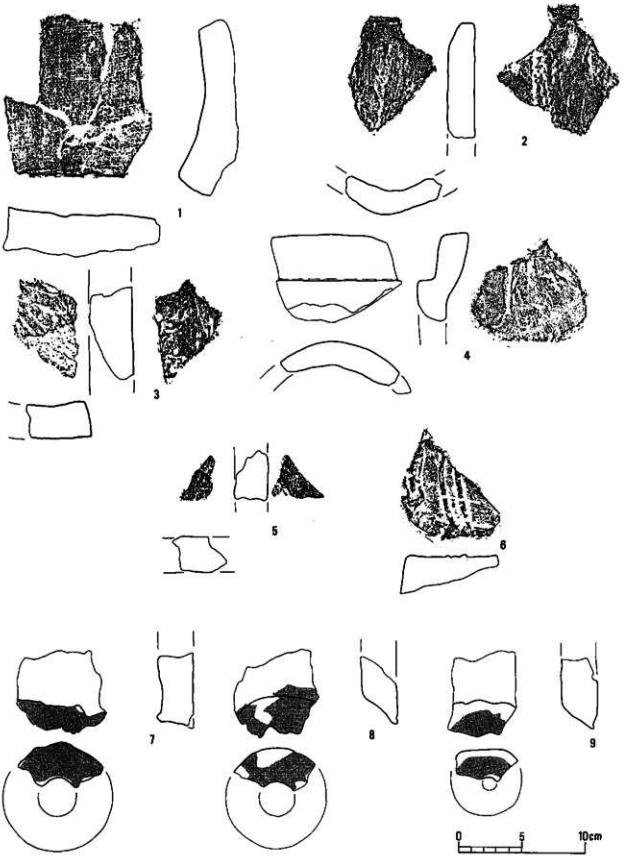
大積寺跡作業風景

第１トレンチ遺物出土状況



第1トレンチ（1、4、5、7、8、10~13、15~18、20、23、25、29、32）
第2トレンチ（9）　第3トレンチ（6）第5トレンチ（26、33）
第6トレンチ（24）第7トレンチ（2、19）第8トレンチ（3、4、21、27、28、30）表採（31）

第8図　大積寺跡出土遺物（1）



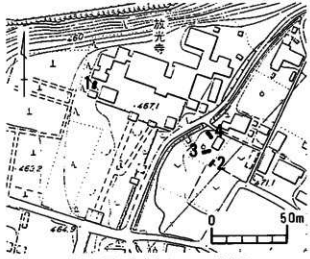
第1トレンチ（1、2、5～9）　第4トレンチ（4）　第8トレンチ（3）
第9図　大横寺跡出土遺物（2）

3．放光寺（ほうこうじ）

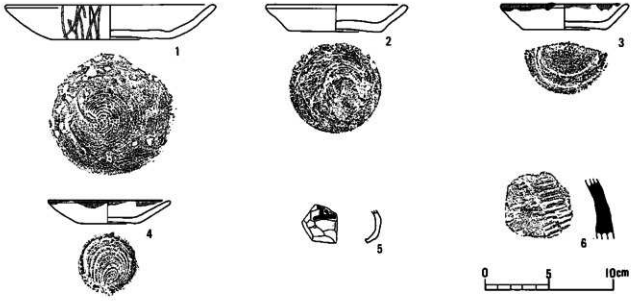
所在地　塩山市藤木
時　代　平安時代～中世
遺　構　不明
遺　物　布目瓦（平瓦）、土師器（坏）、須恵器

甲府盆地北東部、笛吹川左岸に位置し、標高470 mを測る。放光寺は、寿永3年（1184）に安田遠江守義定の創建とされる古刹で、本尊の木造大日如来坐像、木造不動明王立像、木造愛染明王坐像などは藤原末期作で国の重文に指定されている。今回の調査では、住職の清雲俊元氏のご教示により5本の試掘トレンチを設定した。試掘の結果、遺構などは確認できなかったが、わずかながら土師器破片、須恵器破片、布目瓦が検出されている。出土した遺物は第12図、第13図に示したとおりである。第12図1～4は土師質土器、5は土師質の土製品、6は須恵器である。第13図は、1～3、5～7は平瓦、4・8は丸瓦（玉縁部分）である。今回の調査によって確認された遺物については、第12図5・6、第13図7・8で、第12図1～4、第13図1～6の遺物については、放光寺所有のものである。

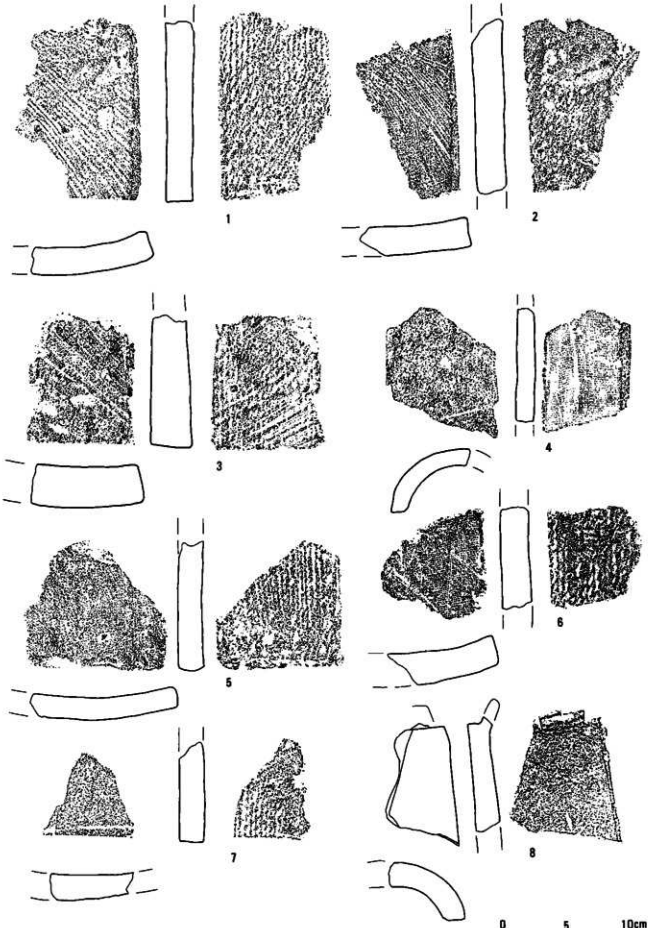
第10図　放光寺位置図



第11図　放光寺トレンチ設定図



第12図　放光寺出土遺物



第13図　放光寺布目瓦

放光寺第１トレンチ調査風景

第２トレンチ調査風景

第１トレンチ完掘状況

4．温湯遺跡（ぬくゆ）

所在地　東八代郡境川村大窪字温湯
時　代　平安時代
遺　構　住居跡、土坑
遺　物　布目瓦（丸瓦・平瓦）、土師器（坏・羽釜・甕）、墨書土器

第14図　温湯遺跡位置図

境川村の中心部である藤垈集落から、南東に御坂山地の鷲宿峠へ向かうと、虚空像山と猪山に挟まれて大窪集落がある。この集落は、名所山から流れ出した境川の扇状地扇頂に位置している。大窪は、『甲斐国志』によれば大久保とも書かれたようであり、戦国期には大窪郷と呼ばれていた。この地はかつて中道往還と若彦路を結ぶ交通の要所として栄えた。遺跡は集落の北側に位置し、標高520mの緩傾斜面に立地する。付近には縄文時代～室町時代にかけての遺跡が分布している。

本遺跡は、過去の耕作中に布目瓦や土師器が出土したことから、1984年度に県教育委員会による生産遺跡分布調査で、窯跡の確認調査が行われている。しかし、このときの調査では窯跡が確認できず、住居跡や土坑が発見されるに留まったが、灰釉陶器・土師器・布目瓦が出土した。その中でも特に布目瓦は丸瓦の完形品（第18図38）が出土し、近くに寺院跡の存在を想起させるに十分であった。

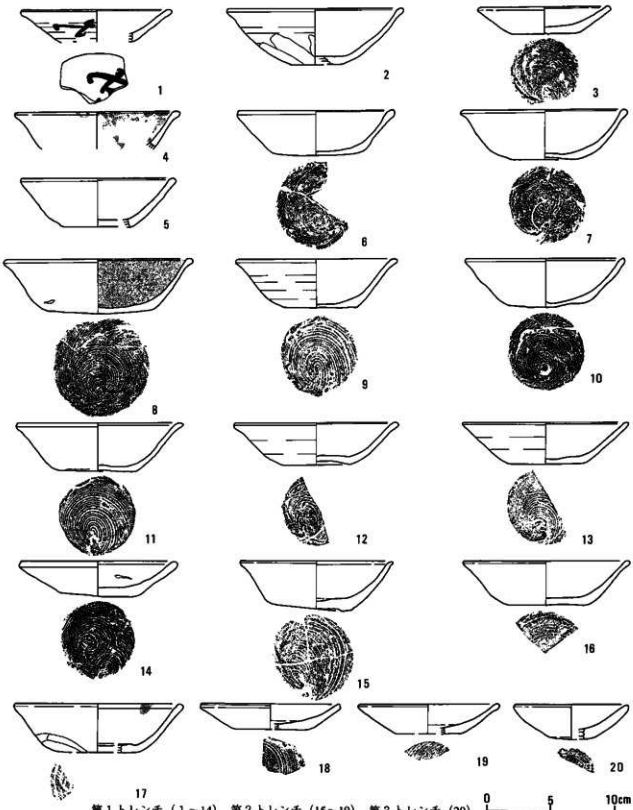
第15図　温湯遺跡トレンチ設定図

そこで、今回は道路より南側の、一段高い所に位置する畑を中心にトレンチを3本設定した（第15図）。調査の結果、第1号トレンチからは平安時代末葉の住居跡が1軒発見され、第2・3号トレンチからはほぼ同時期と考えられる土坑7基が発見された。これらトレンチからは、瓦の出土はなく、建物跡と考えられる柱跡も発見できなかった。

出土した遺物は第16～18図に示したとおりである。第16図に示したものは坏、1は側面に墨書が施されている。22～24は皿。

温湯遺跡調査風景

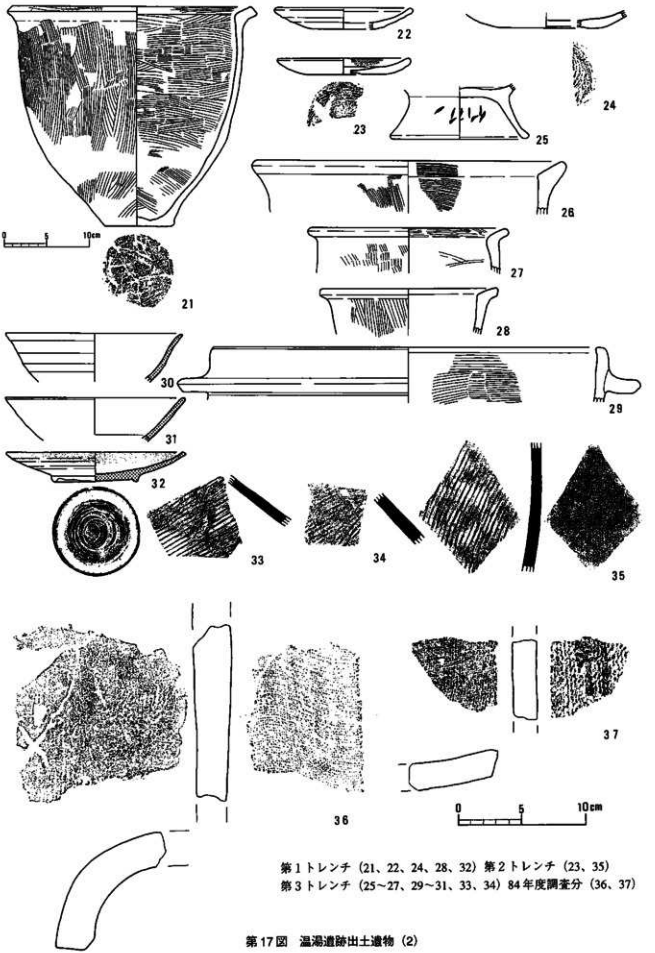
温湯遺跡近景



第1トレンチ（1～14）　第2トレンチ（15～19）　第3トレンチ（20）

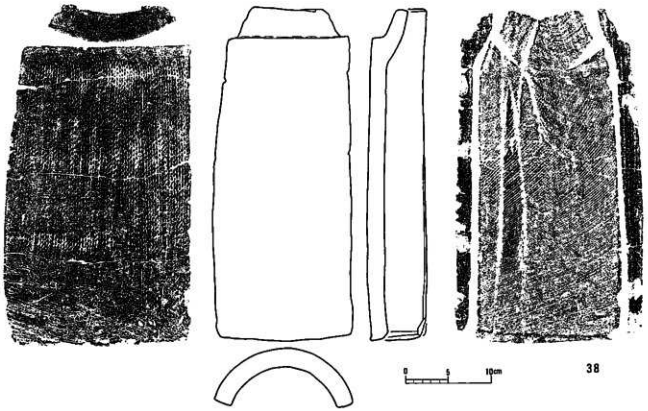
第16図　温湯遺跡出土遺物（1）

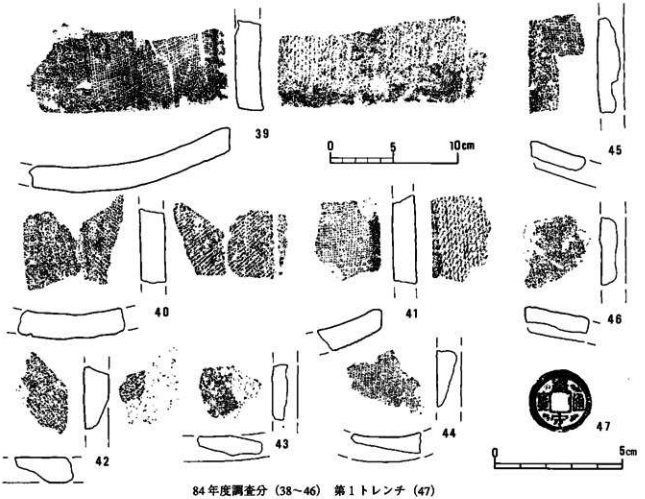
25は高台付坏で、内外面に墨書が施されている。21・26～28は甕。29は羽釜。30・31は灰釉の坏。32は灰釉の皿。33～35は須恵器の甕である。36～44は布目瓦であるが、これらの大部分は1984年度の調査で出土したものである。38は完形品である。36・38は丸瓦、37・39～44は平瓦である。これら遺物の時期については、土器類が甲斐型土器編年の Ⅲ期に位置づけられることから平安時代末期と考えられる。



第1トレンチ（21、22、24、28、32）第2トレンチ（23、35）
第3トレンチ（25～27、29～31、33、34）84年度調査分（36、37）

第17図　温湯遺跡出土遺物（2）





84年度調査分（38～46） 第1トレンチ（47）

第18図 温湯遺跡出土遺物（3）

5．瑜伽寺（ゆがじ）

所在地　東八代郡八代町永井字上組
時　代　奈良・平安時代
遺　構　石列遺構、住居跡、上坑
遺　物　布目瓦（軒平瓦・平瓦・丸瓦）、土師器（坏・甕）、灰釉陶器、緑釉陶器

第19図　瑜伽寺位置図

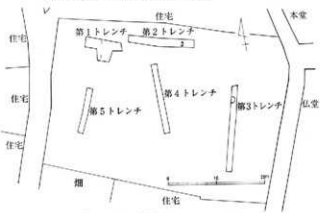
御坂山地から流れ出した浅川が形成した扇状地の扇央部に位置している。永井は『甲斐国志』によると長井ともかかれていたようで、戦国期には長井郷と呼ばれていた。付近には条里制の遺構がみられ、『和名抄』に記載されている長江郷に比定され、古くから栄えていた集落であることが知られている。瑜伽寺は浅川の右岸の標高295mに立地している。付近には縄文時代～平安時代にかけての遺跡が分布している。

瑜伽寺は、無碍山法雲院と号する臨済宗向嶽寺派の寺院である。寺伝では霊亀元（715）年に無音律師により創建された真言宗寺院で、薬師堂には白鳳時代～天平時代の塑像があったが、損壊して昭和18年に東京国立博物館に移され、保管されている。

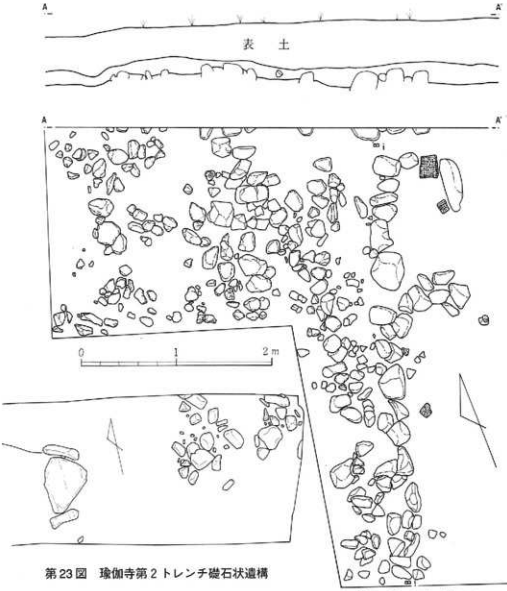
調査地区は、瑜伽寺の西側に接した旧寺域内に属する梅畑に5本のトレンチを設定した。調査の結果、遺構については、第1号トレンチから南北に軸を持つ石列遺構が布目瓦や土器類を伴って発見された（第22図）。これは現在の瑜伽寺の中心軸より約50mほど離れており、寺院跡と関連するものと考えられる。第2トレンチからは礎石状の遺構（第23図）に伴って「銭」状の青銅品と緑釉陶器片が発見されている。この他のトレンチからは弥生～平安時代の遺構が発見できた。

第20図　瑜伽寺調査区位置図

瑜伽寺調査風景



第21図　瑜伽寺トレンチ設定図



第23図　瑜伽寺第2トレンチ礎石状遺構

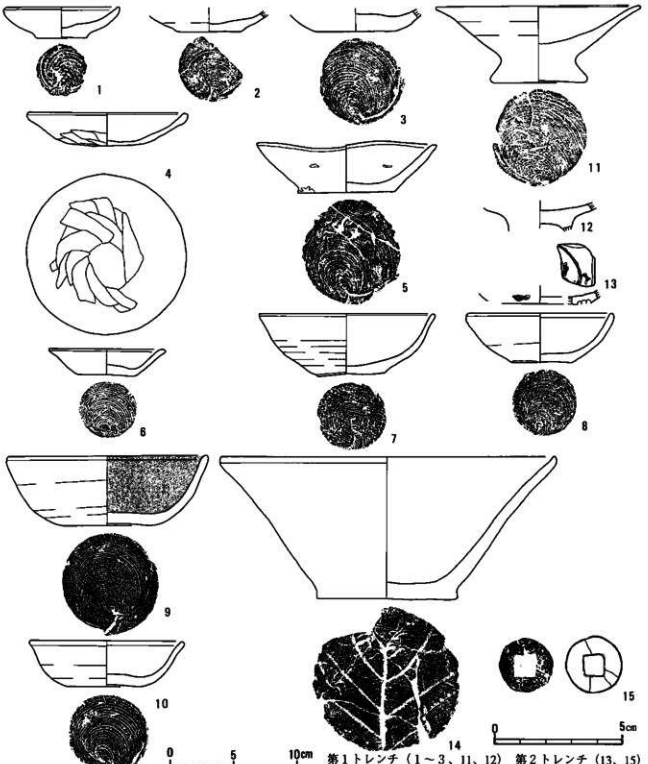
第22図　瑜伽寺第1トレンチ石列

第2トレンチ遺構確認状況

第1トレンチ遺構確認状況

石列遺構（北から）

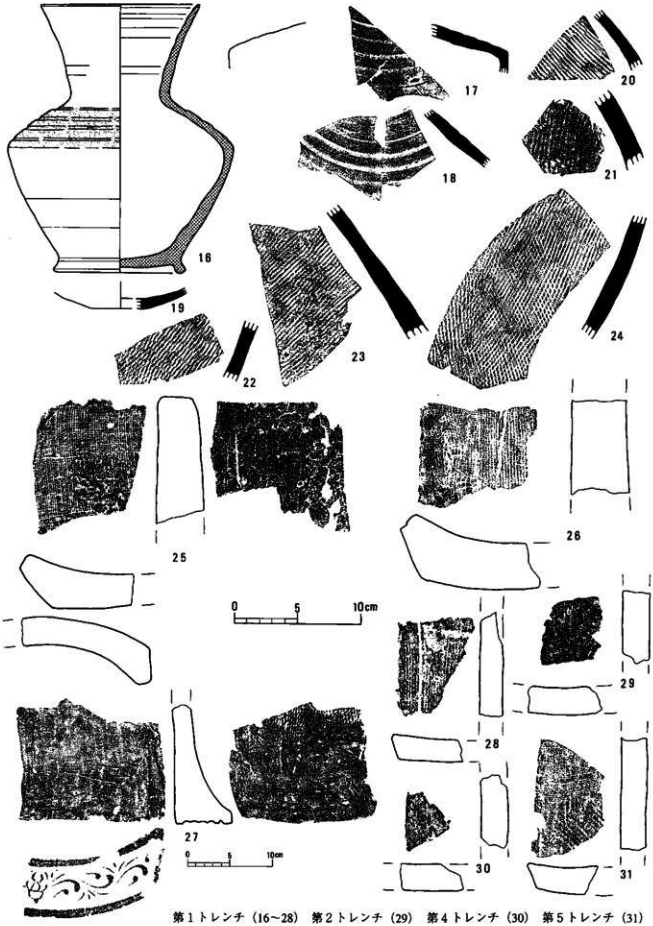
軒平瓦出土状況



第1トレンチ（1～3、11、12）　第2トレンチ（13、15）
第3トレンチ（4～6）第4トレンチ（7～10、14）

第24図　瑜伽寺出土遺物（1）

遺物については、第24・25図に示した。1～10は坏で、9については、内面が黒色処理されている。11は台付坏。12は高台付坏。13は緑釉陶器の坏破片で、部分的に釉が残っている。14は鉢。15は「銭」と考えられるものであるが、磨滅が著しく銭種は不明である。16～18は灰釉の広口壺で、年代的には7～8世紀にあたるものと考えられる。19は須恵の坏。20～24は甕。25～31は布目の平瓦の破片である。丸瓦片も出土しているが、小破片のため制愛させて頂いた。27は均整忍冬唐草文が施された軒平瓦で、国分尼寺で検出されたものに非常に酷似している。これら遺物の時期については、土器類が甲斐型土器編年のⅢ期以降に該当し、平安時代末期に位置づけられるものが主体をなすが、須恵器や瓦などにおいては奈良時代の所産と考えられるものが含まれている。



第1トレンチ（16～28） 第2トレンチ（29） 第4トレンチ（30） 第5トレンチ（31）

第25図 瑜伽寺出土遺物（2）

6．七日子廃寺（ななひこはいじ）

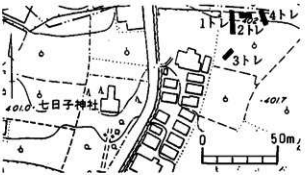
所在地　山梨市七日市場字宮の平
時　代　平安時代
遺　構　配石遺構
遺　物　布目瓦（丸瓦・平瓦）、土師器（坏・甕）

甲府盆地の北東、笛吹川中流の左岸に沿う平野部の緩傾斜地、標高400m付近に立地している。本遺跡は山梨市七日市場宮の平と塩山市三日市場字乙川戸にまたがる遺跡で、旧来より布目瓦が採集されることから、『七日子廃寺』の名称を持つ。かつて均整唐草文が施される軒平瓦が発見されている。昭和24年の調査では平安時代の住居跡が発見されているが、寺に関係する遺構は発見されていない。七日子神社周辺からは縄文土器や古墳時代～平安時代の土師器などが多数表面採集することができる。

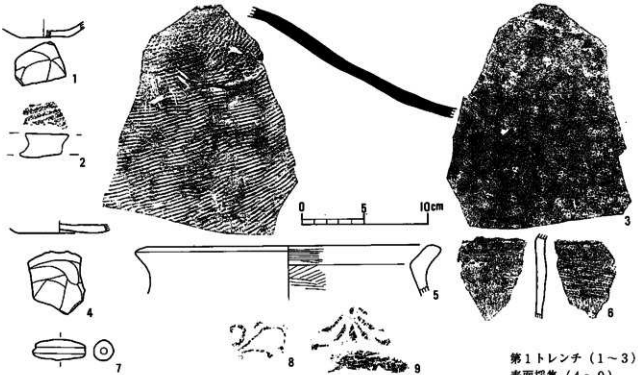
瓦は主に神社の北東部の塩山市側を中心に分布しており、現在は桃・柿などの果樹園として利用されている。調査地区は、神社の北東約100mの荒地に、4本のトレンチを設定した。遺構は第1トレンチから発見された性格不明の配石遺構が発見されたのみで、寺院跡に関連する遺構については発見できなかった。

出土した遺物は、第28図に示したとおりである。1・4は坏。5・6は甕。3は須恵の甕、3については配石遺構に伴って出土している。2は平瓦の破片、8・9は軒平瓦の破片。7は管状土錘である。

第26図　七日子廃寺位置図



第27図　七日子廃寺トレンチ設定図



第1トレンチ（1～3）
表面採集（4～9）

均等唐草文瓦［川口純一（1978）より］（約1/3）

第28図　七日子廃寺出土遺物

7．大善寺（だいぜんじ）

所在地　東山梨郡勝沼町勝沼字道上大善寺境内
時　代　奈良・平安時代
遺　構　石段
遺　物　布目瓦、中世の土師質土器

大善寺は、標高1091ｍの高尾山から西南西に伸びる尾根の南麓に位置し、さらに東西をその支尾根に囲まれ、南に日川が横たわり風水思想にもかなう立地をもっている。

当寺は、平安前期に古代豪族三枝氏によって建立された寺院と伝えられる。本堂の東約１kmの白山中腹から発見された康和５年（1103）銘の経筒によると、「柏尾山寺往生院」と記されるなど、「柏尾山寺」「かしはをの山寺」などと称されていたことが知れる。またこの経筒銘によれば、大善寺は古来真言密教の中心地として知られるが、当時は天台系であったこともうかがえる。大規模な伽藍は幾度かの火災にあったものの、平安時代以降鎌倉～江戸の各時代に時の首長の庇護を受け、今日に至るまで、時代の変革に左右されず寺勢を維持している。本堂の薬師堂は正応４年に竣工した県内最古の寺院建築で、方５間・単層寄棟造り・檜皮葺、和様建築の代表的遺構で厨子とともに国宝である。また本尊の木像薬師如来坐像は「葡萄薬師」とも呼ばれ、日光・月光の両脇侍とともに一木造りの漆箔像、弘仁貞観期の作で国重文である。

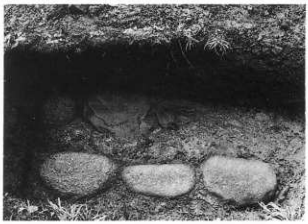
調査は大善寺に伝わる絵図によるところの「光明院跡」南のテラスへ、４本のトレンチ（第１～４トレンチ）を入れたが遺構は認められなかった。遺物は、第１トレンチからは１・３～７が出土し、５のみが平安時代の甕の口縁部破片で、他は中世に属する土師質土器である。第３トレンチからは９・10の布目瓦の破片、第４トレンチでは８の陶器片が出土した。また「正覚院跡」に２本のトレンチ（第５・６トレンチ）を入れたが、攪乱が多く遺構・遺物とも検出できなかった。本堂東の「護摩所（第７トレンチ）」からは焼土と土師質土器の小破片が出土している。「五重塔跡」の南へ第８トレンチを入れた。この第８トレンチからは石段が検出された。これに連なる石段らしきものの一部が地表に露出しており、これが行者堂に向かう石段に切られている。検出地点よりさらに上に続く遺構と考えられる。第８トレンチからは、炭化物が多く付着し燈明皿として使用された中世に属する土師質土器が出土している。また、寛永通宝が第８トレンチから２枚、第３・４トレンチからは各１枚が出土している。

第29図　大善寺位置図

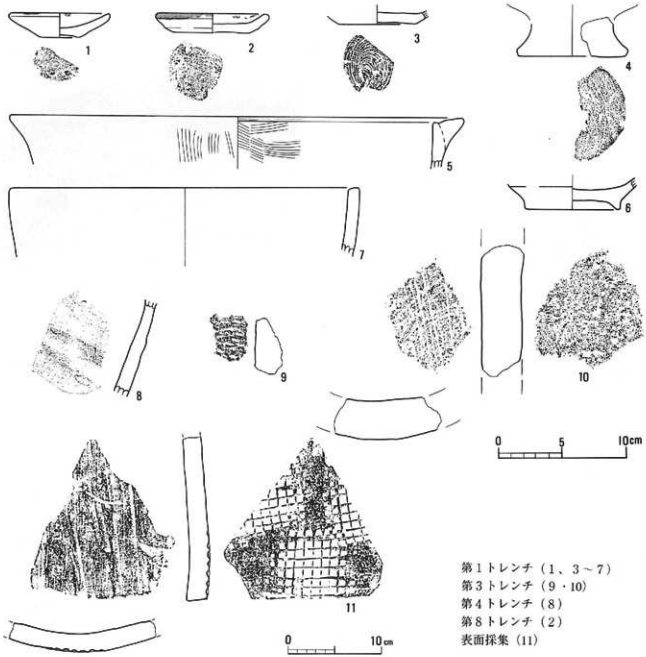
大善寺遠景

第30図　大善寺トレンチ設定図

第８トレンチ（奥に行者堂）



第８トレンチ石段



第１トレンチ（１、３～７）
第３トレンチ（９・10）
第４トレンチ（８）
第８トレンチ（２）
表面採集（11）

第31図　大善寺出土遺物

8．心経寺横手遺跡（しんぎょうじよこて）

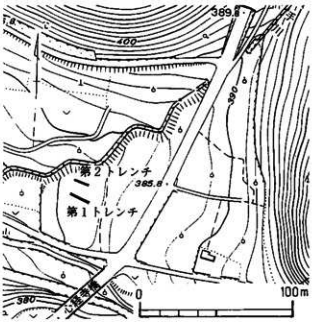
所在地　東八代郡中道町心経寺字横手
時　代　平安時代
遺　構　なし
遺　物　土師器

滝戸山の支尾根によって、南面～東面～北面と大きくぐるりと取り囲まれた緩斜面にあたり、南側に心経寺川、北はその支流横手川によって区切られた低い舌状台地上に心経寺横手遺跡は立地する。そして遺跡の北西約100mの位置に安国寺が現存する。

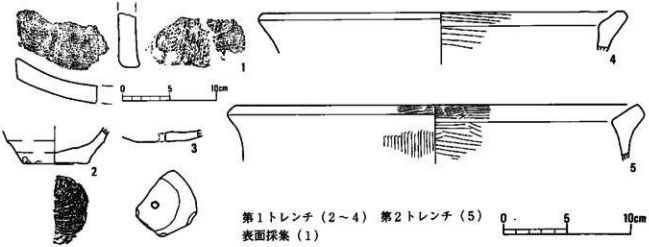
安国寺は、南北朝期の暦応2年（1339）夢窓疎石が足利尊氏・直義兄弟に戦没者慰霊を目的とし、国ごとに一寺一塔の建立を勧めて設置された安国寺利生塔の一つで、甲斐国の安国寺である。そして『中道町史』によれば、地名の由来となった心経寺が、安国寺の前身寺院として存在したという。また寺の周囲から布目瓦が発見されたとも記されている。

1990年の踏査の際にも布目瓦が発見され、その畑の一部を試掘したのが今回の調査である。東西に2本のトレンチを設定し調査を行った。遺物は、第1トレンチから2～4、第2トレンチから5が出土した。1は表面採集である。3は坏もしくは皿の底部破片でていねいに穿孔されている。4と5は甕の口縁部破片で、小さな破片から復元をしたため確実な資料ではない。いずれも平安時代に属するものである。今回の調査では、残念ながら遺構・布目瓦は検出できなかった。

第32図　心経寺横手遺跡位置図



第33図　心経寺横手遺跡トレンチ設定図



第34図　心経寺横手遺跡出土遺物

9．半行寺遺跡（はんぎょうじ）

所在地　東八代郡御坂町成田字半行寺 839
時　代　平安時代
遺　構　溝 1 条（旧河道）
遺　物　土師器、須恵器、墨書土器、布目瓦

半行寺という字名をもつが文献に記録がなく、布目瓦の採集によって想定されたものである。遺跡は国道 137 号の東側で、金川の形成した扇状地末端の平坦地にあたり、国衙推定地および横畑遺跡（本章後掲）から北約 500 mに位置する。また、西約 500 mには平安時代初期を中心とする地耕免遺跡が存在し、さらにこの地耕免遺跡から南には条里型地割りが大きく広がっている。

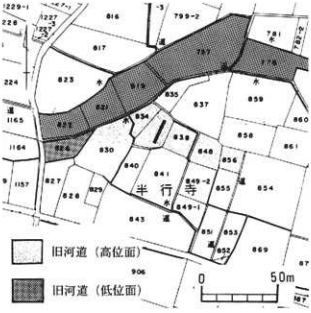
今回の調査は、1990 年の踏査にて布目瓦が多く表面採集された畑から、東側に一段下がった畑にトレンチを 1 本入れた。トレンチの北側は、表土から約 20 ㎝で中礫混じりの黄褐色土の地山となった。これに比べ中央部では、大礫と平安時代の遺物を多く含む酸化鉄まじりの黒褐色シルト質土が厚く堆積し、この下には遺物を含まない灰褐色砂層が認められた。崩壊の危険もあって、灰褐色砂層の上面にて掘り下げを中止した。しかし、トレンチ北側の中礫混じり黄褐色土層の地山と大きな違いを示しており、地形としてはさらに落ち込む可能性がある。そしてこの落ち込みは、東西に走る溝状のものと考えられる。またこの溝には、シルトや砂を主体に構成される堆積層があり、河川の流路に関わると考えられる。トレンチ南側では、近世の石臼を含む比較的新しい礫の集中範囲を確認した。

現地表面ではほぼ平坦に感じられるのに対し、埋没地形に大きな起伏があることにかなり奇異な印象を受けた。そこで試掘調査の後に、1973 年撮影の 1/8000 空中写真を基に地形分類を行った（第 36 図）。その結果、現在の用水路に沿ってとくに低い土地が伸びており、これは旧河道の低位面に当たると判断される。また、この面より高い部分にも旧河道がやや不明瞭ながら認められた。これと試掘の結果と合わせて考えると、この溝は旧河道の高位面の一部と考えられる。

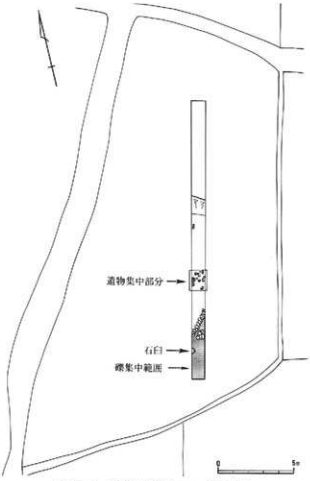
トレンチの中央部からは、第 38 図に示したように、原形をかなり保った完形に近い土器などが集中的にまとまって出土した。とくに墨書のある 18 と 19 は、土器全体の約 8 割が遺存しており、「遺物が置かれた」あるいは「捨てられた」原位置から後世ほとんど移動していないと考えら

第 35 図　半行寺遺跡位置図

トレンチ全景



第36図　半行寺遺跡トレンチ設定図

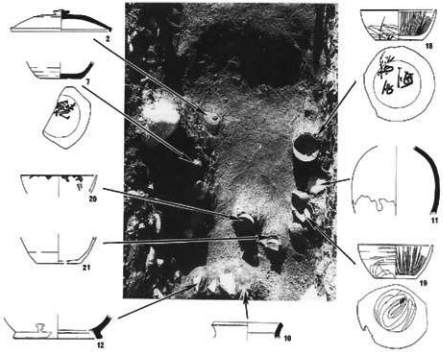


第37図　半行寺遺跡トレンチ平面図

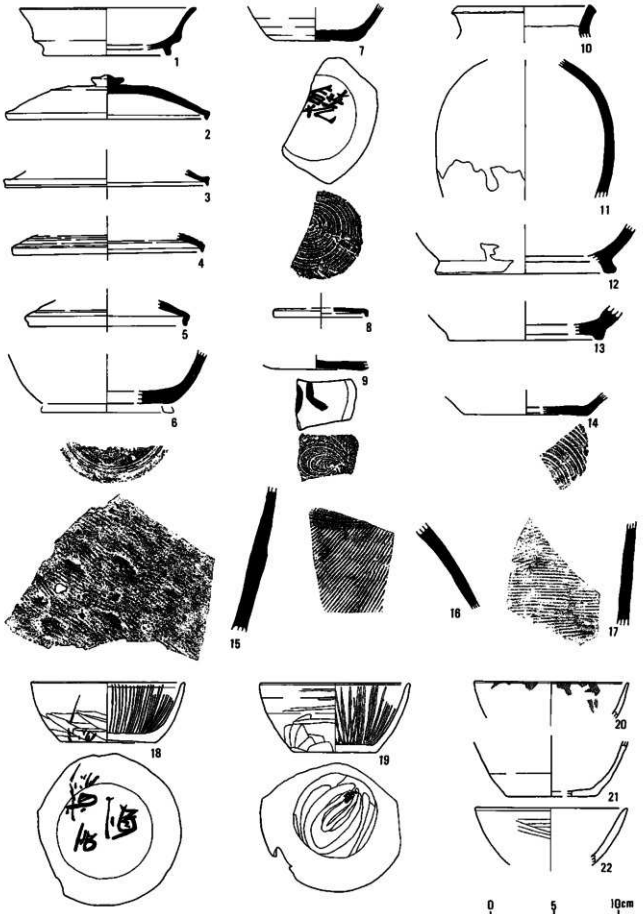
れる。平安時代の単純包含層と考えられる黒褐色シルト質土中からは、木片やクルミの果皮など有機質の遺物も多く出土し、これらも同時代に属すると判断される。

1～17は須恵器である。いずれも平安時代に属するものである。7の坏底部には「饒」の文字が大きく墨書されている。この文字は「豊か・満ち満ちていること」を示す吉祥文字であり、神仏への饗応および豊饒祈願の意味をもつものと考えられる。9も坏底部に墨書の一部が認められる。18・19は11を挟んでほぼ隣接して出土した（第38図）、ともに墨書がみられる。19は体部外面に横へラミガキあり、どちらも内面・見込み部に暗文が施され甲斐型坏の第Ⅲ期（8世紀第4四半期）にあたろうか。18は墨書の痕跡は底部から体部側面に及んでおり、また複数の方向より書かれているようであり判読できなかった。習書であろう。19は底部に小さいながらはっきり「角」と墨書されている。20と27は口縁部に煤の付着があり、灯明具として使用されたものであろう。27はほぼ完形である。28と29にも墨書の一部が認められる。31は手づくねの土器である。32～38は布目瓦である。32・36・37は灰白色、その他は赤褐色を呈する。32は小片ながら、丸瓦と思われる。33と32は1992年度の踏査のときに表面採集されたものである。

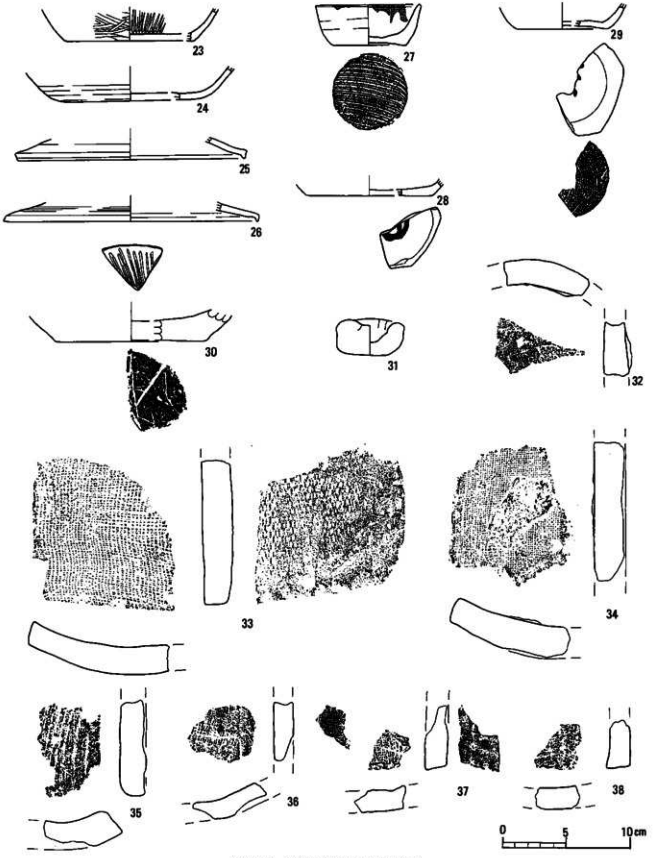
遺物は、布目瓦・墨書土器・皿・灯明具など重要なものが多く発見されたが、遺構は確認できなかった。しかし、トレンチの南から東の付近は土地もやや高く、以前布目瓦が多く表面採集されていることなどから、この部分に何らかの遺構が存在する可能性が濃厚である。また周囲の旧河道部分には有機遺物を多く包蔵すると予想されるため、木簡などの出土の可能性も高い。是非とも今後の継続した調査により、この遺跡が寺院跡なのか官衙遺跡なのか明らかにする必要があろう。



第38図　半行寺遺跡溝内遺物出土状態



第39図　半行寺遺跡出土遺物（1）



第40図　半行寺遺跡出土遺物（2）

10. 円楽寺（えんらくじ）

所在地　東八代郡中道町右左口字七覚4049外
時　代　平安時代、中世
遺　構　不　明
遺　物　土師器（坏・甕）、須恵器、灰釉陶器、常滑

甲府盆地の南縁部に続く曽根丘陵の中央部から丘陵が御坂山系へと続く付け根にあり、南を七覚川が流れ、北は小高い丘を背にした標高約310mの所に立地する。古代より御坂山系を越え中道付近を経由して駿河より多くの文化が甲斐へと流入した。本寺からみて、南西約600mほどにある『宿』の集落は江戸時代から明治時代にかけ宿場町として栄えており、この地区は交通の要衝であった。

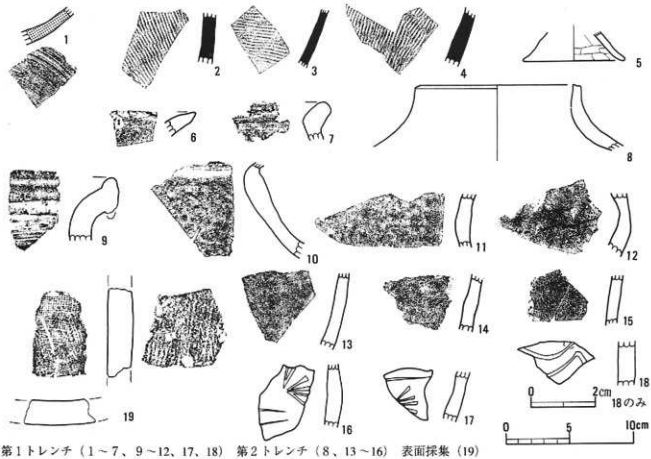
『甲斐国社記・寺記』および『甲斐国志』によると、大宝元年（701）役行者小角により本寺が創建されたとしている。『中道町史』では、平安時代になると、修験の道場として中心的役割をはたしたとしている。天正10年（1582）織田信長に焼かれるまでは頭塔三塔、三十二坊という壮大な景観をもち、多くの寺宝類が伝えられていたという。その後も寺勢を維持し、『甲斐国志』が編纂された江戸時代も、徳川幕府の保護により運慶作とされる薬師如来立像・日光月光菩薩像を安置する本堂、客殿、庫裡、役行者堂などかなりの寺容を維持していた。『甲斐国社記・寺記』では度重なる焼失によって詳しい沿革は分からないとしており、中世以前の歴史は具体的には定かでない。大正6年に再建された現在の本堂には、修験の道場の中心地であることをものがたる役行者の木像および二鬼像が安置されている。これらの像について西川新次氏によれば、作風から12世紀末～13世紀初頭の美術の特色を示す。また役行者像の体背部内刳面にある「延慶2年（1309）修造」の墨書銘についても、平安後期から南北朝ごろまでの銘記を有する仏像での使用例を通観し、「修造」という語句は「修理」の意味に解すべきとしている（西川新次 1994）。つまりこれらの像は鎌倉時代初頭のものであり、これらを造立した背景を考えれば、本寺は平安後期ころには、すでに中道筋における富士山修験道者集合の拠点として栄えていたと思われる。

本寺では1990年の踏査のおり布目瓦（19）が発見された。今回の調査は、本堂の西側に広がる丘陵の南側の緩斜面の畑に東西方向に2本のトレンチを入れた。いずれのトレンチも70cm程度で大礫を含む地山となるが、その上層に焼土粒と炭化粒を比較的多く含む強くしまった層

第41図　円楽寺位置図

調査風景

第42図　円楽寺トレンチ設定図



第1トレンチ（1～7、9～12、17、18）　第2トレンチ（8、13～16）　表面採集（19）

第43図　円楽寺出土遺物

が広がっている。この層からは、土師器・須恵器・灰釉陶器・常滑の破片が出土した。須恵器については時代を判明しがたいがトレンチ北側の丘陵地に古墳時代の後呂遺跡があり、この遺跡に付随した遺物かと思われる。

平安時代と考えられる遺物は灰釉陶器の底部片（第43図1）の他、断片的なものばかりである。出土遺物の中で常滑が半分以上を占め圧倒的に多数にのぼる（6・9～17）。9～17は、13世紀末の甕の破片と考えられる。中でも16・17の常滑には菊花文の押印が見られる。18は古瀬戸の瓶子の胴部片と思われる。焼土粒や炭化粒の広範囲な広がりは天正10年（1582）に織田信長により、焼き討ちされたとする記録と何らかの関係があろうか。

今回の発掘は調査面積が狭く、遺構は確認することはできなかった。以前に表面採集されていた布目瓦についても、今回は発見されなかった。古代の円楽寺の姿を明らかにするためには、現本堂の背後から丘陵部分についても広く調査する必要があろう。

円楽寺遠景

11．横畑遺跡（よこばたけ）

所在地　東八代郡御坂町成田字南畑 632
時　代　古墳時代、平安時代、中世
遺　構　住居跡、土坑、石組
遺　物　石製丸鞘、土師器、須恵器、中世陶器

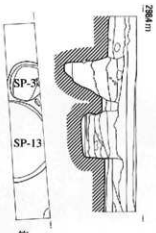
古くより「国衙」の地名から国衙推定地とされながら、発掘調査のメスが入らなかった遺跡である。今回は国衙字堀之内・宮本の東に隣接し土塁跡があったとされる付近を対象とした。立地をみれば、金川が形成した扇状地の末端の平坦地にあたる。南東約 500 m には二之宮・姥塚遺跡と姥塚古墳が存在し、北約 500 m には半行寺遺跡（本章前掲）が存在する。また、北西には条里型地割りが大きく広がっている。

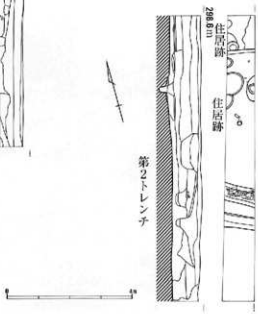
調査は山下氏の屋敷東の桃畑に第１・２トレンチを、さらに屋敷南の桃畑に第３～５トレンチを設定した。第１トレンチでは、２基の土坑と焼土ブロックを確認した。北側の土坑（SP-3）は、人頭大以上の巨礫およびロームブロックを多く含む黒褐色土層を覆土にもち、明らかに人為的に埋め戻されたものである。掘立柱跡かとの疑いをもったが、柱の痕跡などは確認できなかった。遺物は磨滅した土器の細片ばかりで時期は不明である。すぐ南に隣接する土坑（SP-13）は、覆土上部には大礫～巨礫ばかりが集中的に含

第 44 図　横畑遺跡位置図

第 45 図　横畑遺跡トレンチ設定図

第１トレンチ（南から）



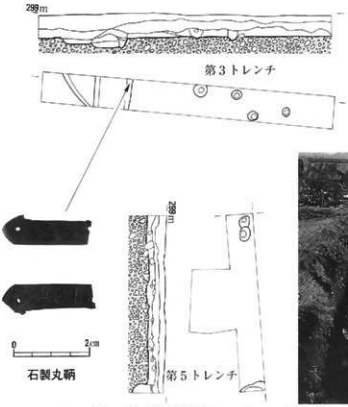


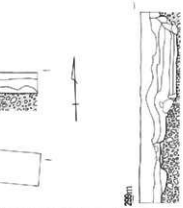
第２トレンチ（北から）

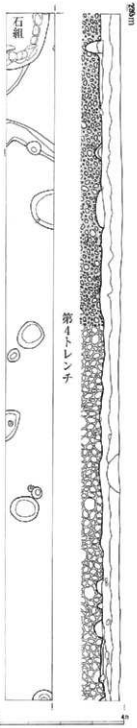
第 46 図　横畑遺跡第１・２トレンチ

調査風景

石組（北から）



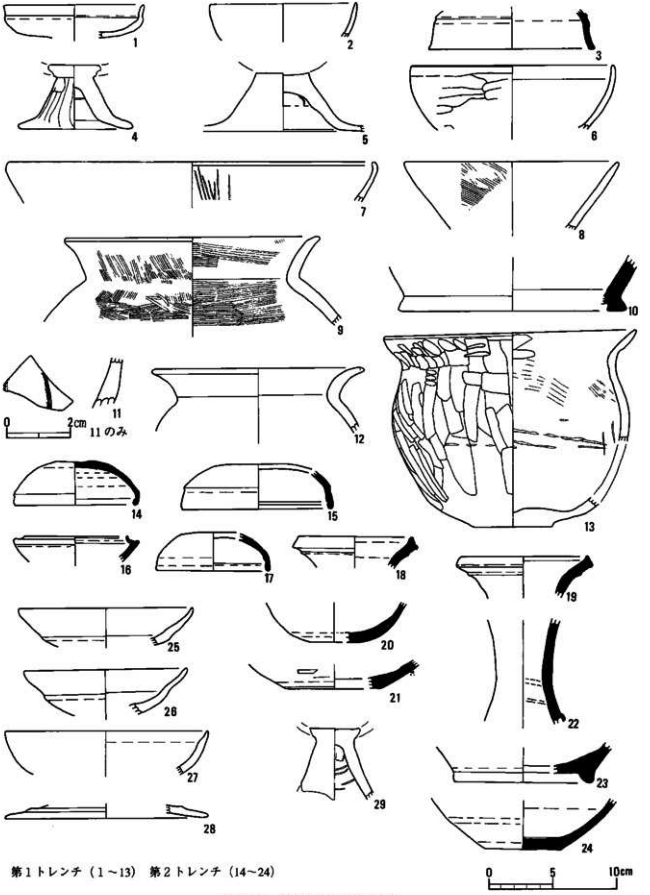




第47図　横畑遺跡第３～５トレンチ　　第４トレンチ（南から）

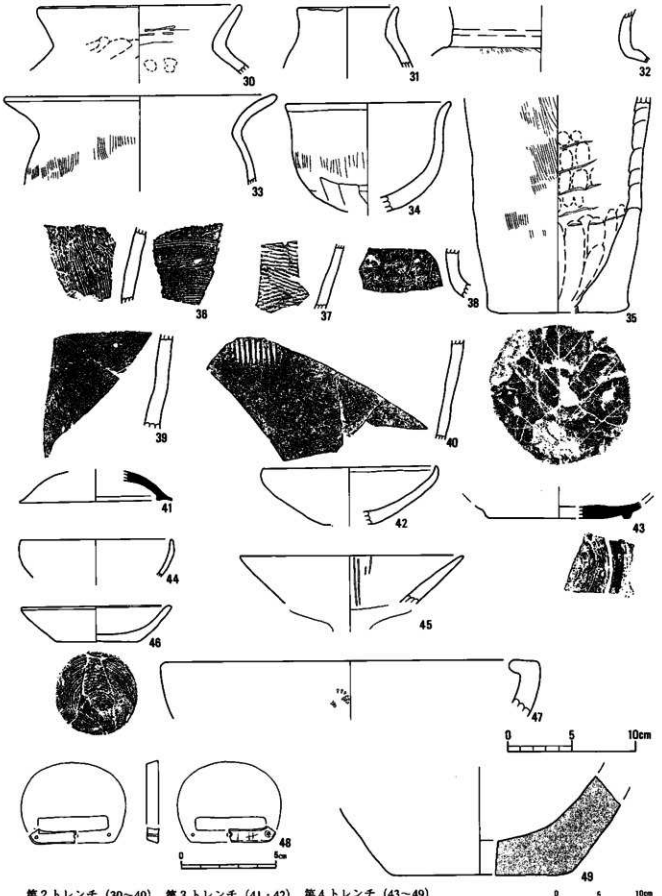
まれ、人為的に投げ込まれたように観察される。しかし、覆土の下部は、水平な層理をもつ黄灰褐色土が見られ、自然堆積である。出土遺物は第48図６・７・９～10・12である。また、トレンチ南端では焼土ブロックの集中があったが、住居跡床面・竈などは確認できなかった。注目されるのは、小片ながら竜泉窯系の青磁の小片（11）である。第２トレンチからは、古墳時代後期を中心とした土師器・須恵器などが多く出土し、重複した住居跡らしきもの２軒を確認した。またその他、赤褐色を呈する37の破片は、黄土が塗布された猿投窯産の甕で、８世紀頃のものと考えられる。38～40は、12世紀に属する常滑の破片である。

第３～５トレンチでは、地山が砂礫層であり、第１・２トレンチと劇的に異なる。第３トレンチでは、浅い溝らしき遺構から、石製丸鞆（腰帯の装飾具、裏面に線刻が認められる）と思われる断片（48）と中世に属する石擂鉢の底部破片（49）が出土した。第４トレンチの北端からは、土坑状の掘り込みの中に積まれた石組を確認し



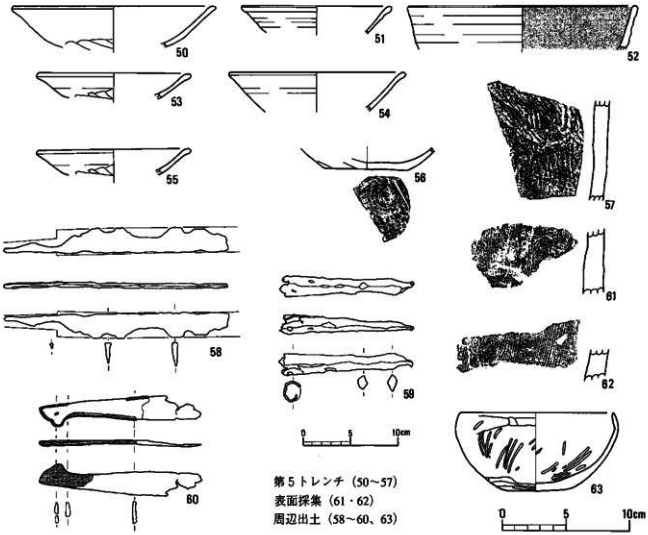
第1トレンチ（1～13）　第2トレンチ（14～24）

第48図　横畑遺跡出土遺物（1）



第2トレンチ（30～40）　第3トレンチ（41・42）　第4トレンチ（43～49）

第49図　横畑遺跡出土遺物（2）



第50図　横畑遺跡出土遺物他

た。この覆土は、地山が砂礫層であるのに比べ、細礫を若干とわずかに炭化物を含むのみで注目される。しかし、この遺構に伴う遺物はなく、時期・性格とも明らかでない。また南側では、中～大礫の集中があり、そのすぐ北から平安時代末に属する完形の坏（46）が出土した。さらに南端では、深さ約80㎝を測る柱穴らしきピットを発見した。礫集中の性格を確認するために第5トレンチを設定した。その結果礫集中は、礫の大きさの変化が連続的であるため洪水堆積物であると判断した。遺物は、甲斐型坏（50・51、53～56）・内黒土器（52）など甲斐型土器編年Ⅷ～Ⅺ期（ほぼ9世紀代）が出土した。57は黒褐色の中世陶器である。

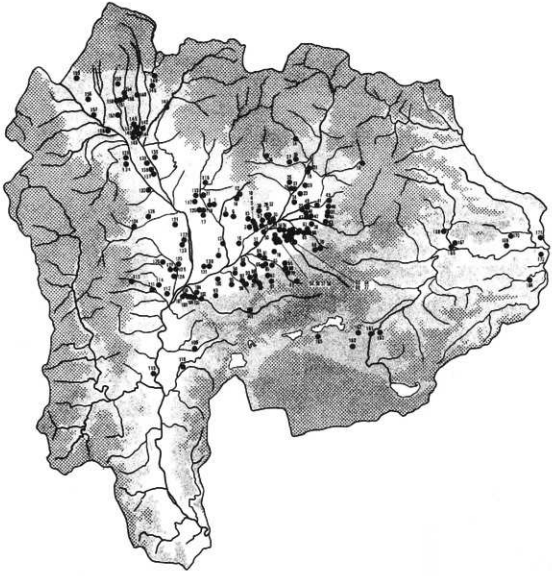
その他、表面採集した埴輪片2点（61・62）、第1トレンチに隣接する国衙字堀之内37番地出土の古墳時代中期の土師器塊(63）などがある。58～60は国衙字宮本24番地出土とされるものである。58は鉄刀であり、59も同じく鉄製で基部が袋状をなし工具であろうか。60は鉄板に薄い銅板を被せたものであり、馬具の鞍下の切付につける野呂（のぐつ）という武具の一部である。

今回の調査では、古墳時代では後期の遺構や遺物を中心に若干の中期の遺物が認められ、二之宮・姥塚遺跡に連なる集落跡の広がりを確認した。しかし、国衙の存在を直接に証拠づけるものは認められなかった。とはいえ、第4トレンチの石組をはじめとして、ピットを中心とした約20基の遺構や、公的権力に結びつく可能性の高い石製丸鞆の出土など注目点も多く、今後の継続的な調査が望まれる。

第Ⅲ章　古代官衙・寺院跡分布・文献調査

山梨県内にて、古墳時代後期から平安時代までの官衙および仏教関連の遺跡・遺物を網羅すべく集成したのが本章である。主に1990年度にこうした文献調査と踏査による現地調査を進め、その後の試掘調査などの基礎資料とした。

古記録では、『甲斐国志』を中心とし『甲斐国社記・寺記』や市町村史などを補足史料とし、平安時代までに創立された、あるいは開山の人物名により創立が古いと推定される、また行基伝説などの古い伝承をもつなどの寺院を取り上げた。仏像など美術工芸品では、国・県指定文化財を中心に平安時代以前に製作されたものを所蔵する寺院などを取り上げた。さらにこれまでの考古学研究の成果から、官衙に比定されている場所、金属製あるいは石製の腰帯具が出土し、公的権力に結び付く可能性が強い遺跡、銅鏡や瓦塔など仏教に関わる遺物を出土した遺跡、布目瓦が出土したもしくは表面採集された遺跡を取り上げた。これらの分布を第51図に示し、とくに重要な8遺跡を「主要古代官衙・寺院跡」として概要を取り上げた。その他については「古代官衙・寺院跡一覧」にまとめた。不確かな伝承だけの寺院も多く含むが、この第51図からみると、現在の東八代郡と東山梨郡にほぼ当たる大きなまとまり、敷島町と甲府市にまたがる集中、北巨摩郡の集中などが読み取れる。これらの分布は様々な意味をもつものと思われるが、これらについては今後の調査・研究に期待したい。

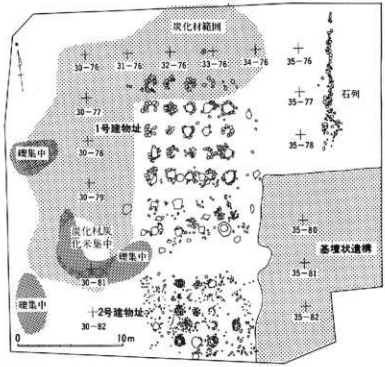


第51図　山梨県古代官衙・寺院跡分布図（番号は一覧に同じ）

1．主要古代官衙・寺院跡

No.29　国府遺跡（こお）　東山梨郡春日居町鎮目

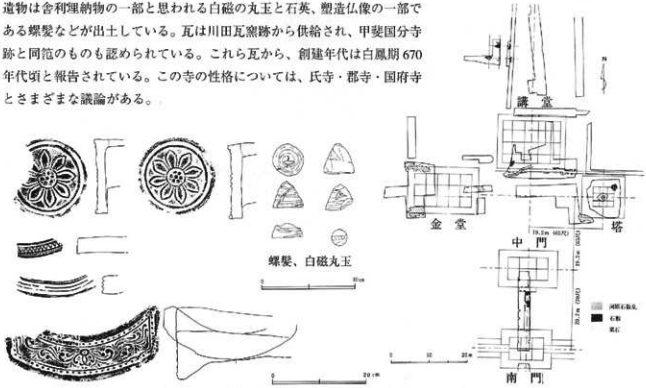
第1次調査により、4間×4間＋3間×2間の桁行7.16 m梁行13.9 mの礎石建物跡（1号建物跡）が確認された。その後の第5次調査により、この南の2号建物跡が、1号と同規模の東西7.16 m×南北13.9 mとなることが明らかにされた。この2棟の周辺には砂質土壌を固めた基壇状の面と、1号建物跡北側の炭化物散布面と炭化米のブロックが確認された。これらは、高床総柱の礎石建物跡であり、焼けた籾を出土することから、米倉としての正倉群と推定されている。さらに、地中レーダーなどの調査により東西140 m×南北150 mが、正倉推定区域とされ、5～10棟分の南北棟の倉庫が建ち並ぶ状況が推定できるという。時期は奈良～平安時代前期に属すとされる。郡衙の正倉群あるいは国府に伴う正倉群と考えられる。



第52図　国府遺跡［春日居町教育委員会（1989）より］

No.33　寺本廃寺（てらもとはいじ）　東八代郡春日居町寺本

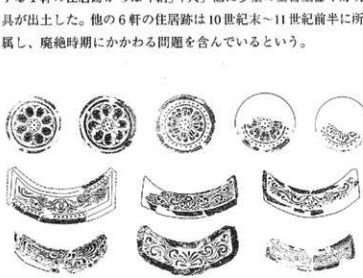
寺域は、築地周隔で東西・南北とも約130 mの正方形の1町四方とされる。金堂・塔・講堂・僧房・中門・南門を確認し、回廊・北門・西門・東門の位置もほぼ確認されている。伽藍配置は法起寺式の可能性が高いという。遺物は舎利埋納物の一部と思われる白磁の丸玉と石英、塑造仏像の一部である螺髪などが出土している。瓦は川田瓦窯跡から供給され、甲斐国分寺跡と同笵のものも認められている。これら瓦から、創建年代は白鳳期670年代頃と報告されている。この寺の性格については、氏寺・郡寺・国府寺とさまざまな議論がある。

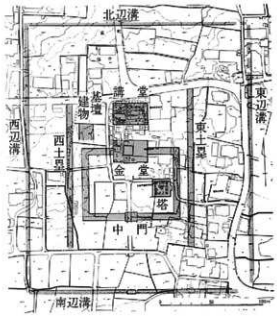


第53図　寺本廃寺［春日居町教育委員会（1988）より］

No.60　甲斐国分寺跡（かいこくぶんじあと）　東八代郡一宮町国分

寺域は南北255m（860尺）、東西（750尺）220mに復元される。伽藍は、南北129尺、東西100尺の長方形の地割りの中に配置されたと考えられる。中門から派生した回廊は塔を内側に取り込み、金堂に接続することが予想される。回廊の北には鐘楼あるいは経蔵といった基壇建物が置かれ、講堂は金堂の背後に置かれる。更に外側には東西の土塁があり、これらを取り巻くように存在したものと考えられる。創建にかかわる瓦は、川田瓦窯跡・上土器瓦窯跡から供給され、その年代は760年代はじめ頃とされる。出土土器も8世紀中葉が上限である。寺域内から竪穴住居跡7軒を確認した。その中の10世紀後半に属する1軒の住居跡からは「鞆」「大」他に多量の墨書土器や灯明具が出土した。他の6軒の住居跡は10世紀末～11世紀前半に所属し、廃絶時期にかかわる問題を含んでいるという。

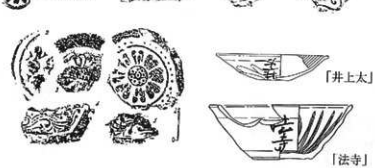


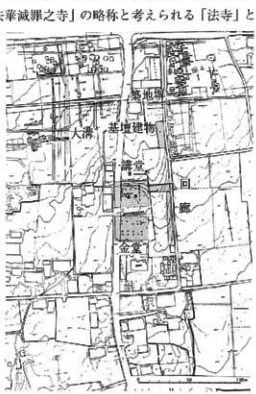


第54図　甲斐国分寺跡［一宮町教育委員会（1990）より］

No.61　甲斐国分尼寺跡（かいこくぶんにじあと）　東八代郡一宮町東原

金堂跡・講堂跡・北側築地塀跡・基壇建物跡に加えて、寺域内から掘立柱建物跡・住居跡などが確認されている。また築地塀の北側からは、8世紀末～9世紀前半（創建期）と10世紀前半（修復に関わる時期）の竪穴住居跡群なども確認されている。ここからは、国分尼寺の正式名称の「法華滅罪之寺」の略称と考えられる「法寺」と書かれた墨書土器が出土している。講堂跡の北西約100mの位置にある90確認調査地区からは、2条の溝やその外側には10世紀前半～11世紀にかけての竪穴住居跡群を確認し、また『和名抄』に載る郷名に関わると考えられる「井上太」の墨書土器が発見されている。





第55図　甲斐国分尼寺跡［一宮町教育委員会（1990・1994）、大場ほか（1938）より］

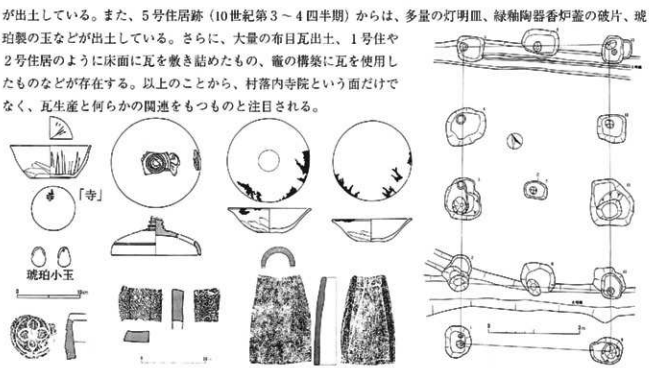
No.138　宮ノ前第２遺跡（みやのまえ） 韮崎市藤井町駒井字宮ノ前

東西約13ｍ南北約９ｍの規模をもつ４間×５間の４号掘立柱建物跡は、２間×３間の身舎（もや）部分の柱穴は掘り込みも深く石を用いた堅固なつくりで、四面庇付の特殊な建物と考えられる。この建物跡は奈良時代に属すとされ、周辺から丸瓦・平瓦・鬼瓦が出土している。なお軒瓦は発見されていない。また瓦塔の破片も発見されている。約300ｍ南に位置する宮ノ前遺跡では「寺」の墨書土器が出土している。村落内寺院と考えられる。

第56図　宮ノ前第２遺跡［韮崎市教育委員会（1991）より］

No.9　桜井畑遺跡Ａ地区（さくらいばた） 甲府市和戸町・川田町

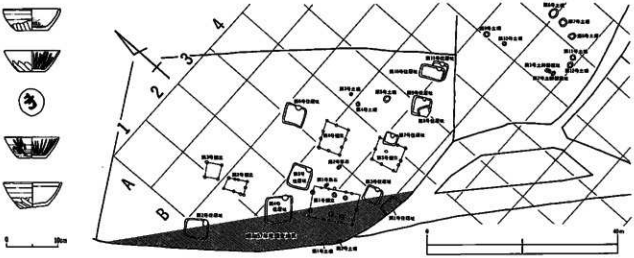
庇付きの２間×４間の掘立柱建物跡が発見され、柱穴覆土内から９世紀後半の土器が出土していることから、９世紀前半に使用されていた建物と推定されている。この南に位置する２号住居跡からは「寺」と墨書された土器が出土している。また、５号住居跡（10世紀第３～４四半期）からは、多量の灯明皿、緑釉陶器香炉蓋の破片、琥珀製の玉などが出土している。さらに、大量の布目瓦出土、１号住や２号住居のように床面に瓦を敷き詰めたもの、竈の構築に瓦を使用したものなどが存在する。以上のことから、村落内寺院という面だけでなく、瓦生産と何らかの関連をもつものと注目される。



第57図　桜井畑遺跡Ａ地区［山梨県教育委員会（1990）より］

No.156　前田遺跡（まえだ）　北巨摩郡小淵沢町下笹尾字前田

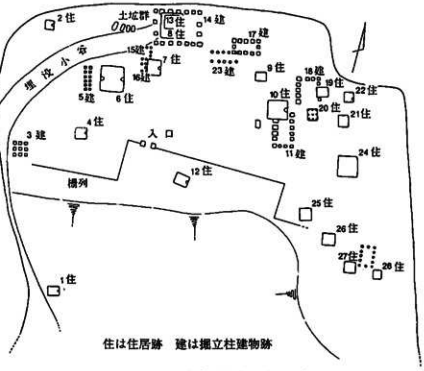
第１号掘立柱建物跡は主軸を南北にとり、３間（6.5ｍ）×６間（9.5ｍ）規模をもっている。外側の浅く小さい柱穴は庇部分にあたるとされ、東西に庇をもつ住居跡と報告されている。またこの建物跡のすぐ北側に位置する第４号住居址からは、「寺」、「永」、「丑」とされる墨書土器が出土している。これらの墨書土器は甲斐型編年のⅧ期にあたる。また、その他に３間×６間（１軒）、１間×１間（１軒）、２間×３間（２軒）２間×２間（１軒）などの掘立柱建物跡が４軒確認されている。その他、小鍛冶的遺構と考えられる第２・６号住居址、土師器窯跡などが発見されている。村落内寺院である可能性がある。



第58図　前田遺跡［小淵沢町教育委員会（1983・1985）より］

No.149　湯沢遺跡（ゆざわ）　北巨摩郡高根町下黒沢字湯沢

９世紀後半から11世紀前半にかけての竪穴住居跡27軒、掘立柱建物跡15棟、および柵列が確認され、一般の集落跡とまったく異なる様相をみせている。方形柱穴による掘立柱建物跡群は、ほぼ中央に位置する６間×３間の14号建物跡を中心に左右に配され、ほぼ対称的となり、全体的には前庭をもつようにコの字形を呈している。また、この建物跡群の前方を画するように、しかもコの字形をつくる建物跡に対応し、内側に折れカギ型をなす柵列が設置されている。出土遺物は、皇朝十二銭の隆平永宝、腰帯金具２点（20号住居跡）、「川」、「千」の墨書土器、布目瓦（１点）などがある。官衙的性格が色濃く、官牧役所などに結びつく可能性が考えられるとされている。



第59図　湯沢遺跡［雨宮（1983）より］

2. 古代官衙・寺院跡一覧

No 1：塩沢寺（えんたくじ）
所在地：甲府市湯村
創 立：天慶年間（947～957）に空也上人が創立［国志］、空也が建立［寺記］
調 査：踏査（1994）
文 献：「甲斐国志」巻之81 仏寺部第9、「甲斐国社記・寺記」巻2

No 2：大坪遺跡（おおつぼいせき）
所在地：甲府市横根町・和田町
布目瓦：丸瓦・平瓦
調 査：発掘（1975・1982）
文 献：「大坪」山梨県遺跡調査団 1976、「大坪遺跡」甲府市教育委員会 1984

No 3：鶴栖院（慶長院）（かくせいいん）
所在地：甲府市朝日3丁目（横沢町）
創 立：弘仁年間（810～823）［寺伝］
文 献：「甲斐国志」巻之73 寺社部第1、「甲斐国社記・寺記」巻3
備 考：慶長元年（1596）に改宗し、慶長院と称する［寺伝］

No 4：上三蓋瓦窯址（かみどきがようし）
所在地：甲府市桜井町上土蔵
布目瓦：甲斐国分寺と同笵の軒丸瓦と軒平瓦・平安時代の軒丸瓦
調 査：発掘（1987・1988）
文 献：「甲府市史」資料編第1巻 1989、「山梨県生産遺跡分布調査報告」山梨県埋蔵文化財センター報告第51集 1990

No 5：川田瓦窯址（かわだがようし）
所在地：甲府市川田町
布目瓦：軒丸瓦・丸瓦・平瓦・鳥居・塼（採集）
調 査：発掘（1989）
文 献：「山梨県生産遺跡分布調査報告書」山梨県埋蔵文化財センター報告第51集 1990

No 6：福命院（きみょういん）
所在地：甲府市東光寺
創 立：天正14年（1586）［寺記］
仏 像：木造阿弥陀如来立像（平安末期）
文 献：「甲斐国志」巻之74 仏寺部第2・巻之100 人物部第9、「甲斐国社記・寺記」巻4、「甲府市史」別編（美術・工芸）1988

No 7：興福寺（こうぞうじ）
所在地：甲府市宮原町
創 立：天治元年（1124）開基は新羅三郎義光［寺記］
大治年間（1126～1131）に新羅三郎義光が創立［国志］
文 献：「甲斐国志」巻之79 仏寺部第7、「甲斐国社記・寺記」巻2

No 8：光堂寺（こうぞうじ）
所在地：甲府市（千塚村）
仏 像：善光寺の本造阿弥陀如来及両脇侍像（藤原期、国重文）は、もと千塚村光堂寺の本尊であったのを移したもの［国志］
文 献：「甲斐国志」巻之74 仏寺部第2、「甲斐国社記・寺記」巻2、「甲府市史」別編2（美術・工芸）1988・第1巻（古代・中世）1991
備 考：光堂寺は武田勝頼が天亀3年（1573）に所領安堵した千塚村の光蔵寺に同じか［法泉寺文書］

No 9：桜井畑遺跡（さくらいばたいせき）
所在地：甲府市和戸町字桜井畑
布目瓦：軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・小型瓦・道具瓦など多量
文 献：「桜井畑遺跡A・C地区」山梨県埋蔵文化財センター報告第54集 1990
備 考：2間×4間の総付掘立柱建物跡（集落内寺院）、「寺」の墨書をもつ4不（2号住）、多量の灯明皿・緑釉陶器香炉片・琥珀製玉（5号住）

No 10：遍遥院（しょうよういん）
所在地：甲府市桜井町
創 立：天文年間（1532～1555）［国志］
仏 像：木造地蔵菩薩立像（平安末期～鎌倉初期）
文 献：「甲斐国志」巻之38 古蹟部第1・巻之74 仏寺部第2・巻之95 人物部第4、「甲府市史」別編（美術・工芸）1988

No 11：青松院（せいしょういん）
所在地：甲府市山宮町
創 立：大永2年（1522）［寺記］
仏 像：木造十一面観音立像（藤原期、県文化財）・木造不動明王立像（藤原期、甲府市指定文化財）
調 査：踏査（1991）
文 献：「甲斐国志」巻之111 上宮部第10、「甲斐国社記・寺記」巻3

No 12：積翠寺（石水寺）（せきすいじ）
所在地：甲府市上積翠寺町
創 立：開山は行基［国志］
文 献：「甲斐国志」巻之82 仏寺部第10

No 13：雪窓院（せっそういん）
所在地：甲府市（古上条村）
創 立：開山は行基［国志］
文 献：「甲斐国志」巻之44 古蹟部第7・巻之79 仏寺部第7

No 14：長宝寺（ちょうほうじ）
所在地：甲府市下積翠寺町
創 立：元禄16年（1703）［寺記］
仏 像：木造釈迦如来坐像（藤原末期～鎌倉初期、甲府市重文）
文 献：「甲斐国志」巻之82 仏寺部第10、「甲斐国社記・寺記」巻2、「甲府市史」別編（美術・工芸）1988

No 15：東畑遺跡B地点（ひがしばたけいせきBちてん）
所在地：甲府市横根町・桜井町
仏 像：小金銅仏（観音菩薩立像、総高11.1cm、像高9.5cm、鋳銅・鋳、鍍金、白鳳期）
調 査：発掘（1994）甲府市教育委員会
文 献：「帝京大学山梨文化財研究所報」第22号 1994、「1994年度上半期 遺跡調査発表会要旨」1994

No 16：福王寺（ふくおうじ）
所在地：甲府市上町
創 立：夢窓国師が草創［国志］
仏 像：木造六観音菩薩立像・木造梵天立像・木造帝釈天立像・木造地蔵菩薩立像・木造菩薩形立像・神像（平安中期～後期）
文 献：「甲斐国志」巻之78 仏寺部第6、「甲府市

甲府市東畑遺跡B地点出土の小金銅仏（実物大）

史」別編 （美術・工芸） 1988

No 17：法城寺址（ほうじょうじし）
所在地：甲府市池田
創 立：養老2年（718）行基が地蔵菩薩を自刻し、篠原岡に安置す［国志］。
調 査：踏査（1990）
文 献：「甲斐国志」巻之44古蹟部第7・巻之46古蹟部第9・巻之74佛寺部第2
備 考：貞観18年（876）に勅額を賜る［寺記］。治暦年間（1065～1069）に古上条（甲府市古上条）へ、永禄年間に古府中へ、天正年間に東光寺に移転したと言われる。

No 18：雲峰寺（うんぽうじ）
所在地：塩山市上萩原裂石
創 立：天平17年（745）に行基が草創す［国志］
調 査：踏査（1990）
文 献：「甲斐国志」巻之75佛寺部第3、「甲斐国社記・寺記」巻2

No 19：常楽寺（じょうらくじ）
所在地：塩山市松里
調 査：踏査（1991）

No 20：七日子廃寺（なないこはいじ）
所在地：山梨市七日市場宮の平・塩山市三日市場字乙川戸
布目瓦：均等唐草文軒丸瓦（甲斐国分寺跡のものと酷似）・丸瓦・平瓦
調 査：試掘（1992.11.19～24）本書第2章参照
文 献：川口純一「七日子廃寺出土の宇瓦について」『歴史と民俗』2 1978、「日下部遺跡調査報告書」山梨市教育委員会1987、「年報」 山梨県埋蔵文化財センター8 1992

No 21：放光寺〔法光寺〕（ほうこうじ）
所在地：塩山市藤木
創 立：寿永3年（1184）［国志］
仏 像：愛染明王坐像・本尊大日如来坐像・不動明王立像（平安後期、国重文）、銅鐘［建久2年（1192）銘あり］
布目瓦：丸瓦・平瓦
調 査：試掘（1991.11.20～12.13）本書第2章参照
文 献：「甲斐国志」巻之75佛寺部第3、「甲斐国社記・寺記」巻2、「年報」8 山梨県埋蔵文化財センター 1992
備 考：もとは山岳仏教寺院として、大菩薩峠麓の一之瀬高橋に建立されたものとされる。

No 22：鴨居寺址〔長福寺〕（かもいでらし）
所在地：山梨市鴨居寺（西後屋敷村）
創 立：寛治2年（1088）［国志］
調 査：踏査（1991）
文 献：「甲斐国志」巻之39古蹟部第2・巻之75佛寺部第3
備 考：鴨居寺は至徳年間（1384～1387）には廃され、慶長年間に再興されたのが現在の長福寺だと伝えられる。

No 23：日下部遺跡（くさかべいせき）
所在地：山梨市小原東
布目瓦：丸瓦・平瓦
調 査：発掘（1948・1949・1957）
文 献：「日下部遺跡調査報告書」山梨市教育委員会 1987
備 考：住居跡約30軒、掘立柱建物跡1棟、墨書土器多数、腰帯具［銅製丸鞆（1・16号）、銅製巡方・鉄製鉸具（2号住）］

No 24：光明寺〔東善寺・東漸寺〕（こうみょうじ）
所在地：山梨市加納岩町上神内川
創 立：天長年間（824～834）［国志］
文 献：「甲斐国志」巻之75佛寺部第3、「甲斐国社記・寺記」巻4
備 考：古くは東善（漸）寺と号すが、元和2年（1616）に改宗し光明寺に改称

No 25：清水寺（せいすいじ）
所在地：山梨市市川
創 立：旱魃祈願のため行基が開創［寺伝］
文 献：「甲斐国志」巻之74佛寺部第2、「甲斐国社記・寺記」巻2
備 考：当初は竜之沢という所にあって岩清水と称していたが、大永元年（1521）移転中興する［寺記］。

No 26：銅印出土地
所在地：山梨市八幡北上ノ原
文 献：「日下部遺跡調査報告書」山梨市教育委員会 1987
備 考：上野晴朗は「主全私印」と読み、郡衙に関係する施設があった可能性を指摘している。

No 27：普賢寺（ふげんじ）
所在地：山梨市北
創 立：建仁元年（1201）［国志］
調 査：踏査（1991）
文 献：「甲斐国志」巻之74佛寺部第2
備 考：古昔修験道の盛なりし時は、窪八幡普賢寺・藤木法光寺の類皆修験の渠魁なる［国志］

No 28：狐塚古墳（きつねづかこふん）
所在地：東山梨郡春日居町鎮目字日陰
文 献：菊島（坂本）美夫「狐塚古墳（春日居町）稲荷塚（一宮町）及び姥舞場古墳（御坂町）出土遺物の集成」「甲斐考古」9－2 1972、坂本美夫「先史時代・古墳時代」「春日居町誌」1988
備 考：銅鋺あり

No 29：国府遺跡（こおいせき）
所在地：東山梨郡春日居町鎮目
布目瓦：若干あり
文 献：「国府遺跡」Ⅰ～Ⅴ 春日居町教育委員会 1989～1993
備 考：礎石建物跡2棟（正倉群か）

No 30：長谷寺（ちょうこくじ）
所在地：東山梨郡春日居町鎮目字善提
創 立：養老6年（722）行基が開創［国志］
布目瓦：丸瓦・平瓦
調 査：試掘（1991.11.20～12.13）本書第2章参照
文 献：「甲斐国志」巻之74佛寺部第2・巻之38古蹟部第1、「甲斐国社記・寺記」巻2、「年報」8 山梨県埋蔵文化財センター 1992

No 31：鎮目寺（ちんもくじ）
所在地：東山梨郡春日居町鎮目
創 立：養老年間（717～724）行基が開創［国志］
文 献：「甲斐国志」巻之74佛寺部第2

No 32：寺の前古墳（てらのまえこふん）
所在地：東山梨郡春日居町鎮目字寺の前
文 献：坂本美夫「先史時代・古墳時代」「春日居町誌」1988
備 考：銅鋺あり

No 33：寺本廃寺（てらもとはいじ）
所在地：東山梨郡春日居町寺本字道万町・神東町・山王町・後町
布目瓦：単弁八弁蓮華文軒丸瓦（白鳳期）・複弁八弁蓮華文軒丸瓦（天平期）、瓦は川田瓦窯跡から供給され、甲斐国分寺跡と同笵の軒丸瓦あり
調 査：発掘（1981・1982・1986）
文 献：「甲斐国志」巻之3村里部第1、「寺本廃寺第1・2・3次発掘調査報告書」春日居町教育委員会 1988、佐野勝廣「寺本廃寺の軒瓦について」「山梨考古学論集」Ⅱ 1989
備 考：金堂・塔・講堂・僧房・中門・南門など確認

No 34：雲峰寺（うんぽうじ）
所在地：東山梨郡牧丘町柚口字小倉原
創 立：仁寿年間（851～854）［寺記］
仏 像：十一面観音像
調 査：踏査（1990）
文 献：「甲斐国志」巻之74佛寺部第2、「甲斐国社記・寺記」巻2、「牧丘町誌」1980
備 考：柚口の入会山中高天原という所から、二本松へ、さらに今の小倉に移る［牧丘町誌］

No 35：慶徳寺（けいとくじ）
所在地：東山梨郡牧丘町倉科
文 献：「甲斐国志」巻之74佛寺部第2、「甲斐国社記・寺記」巻2、「牧丘町誌」1980
備 考：古くは倉科地区間瀬原にあり景徳院と号すが、建久年間（1190～1199）に焼廃せり［牧丘町誌］

No 36：洞雲寺（とううんじ）
所在地：東山梨郡牧丘町北原
創 立：天正年間（1573～1592）創建［国志］
調 査：踏査（1990）
文 献：「甲斐国志」巻之74佛寺第2部、「牧丘町誌」1980
備 考：建久8年（1193）建立の安養寺が前身［牧丘町誌］

No 37：普門寺（ふもんじ）
所在地：東八代郡牧丘町西保下
創 立：建久6年（1195）［国志］
仏 像：木造薬師如来坐像（藤原期、県文化財）
調 査：踏査（1990）
文 献：「甲斐国志」巻之74佛寺部第2

No 38：祝（いわい）
所在地：東山梨郡勝沼町祝
布目瓦：表面採集
調 査：踏査（1990）

No 39：三岳寺（さんがくじ）
所在地：東山梨郡勝沼町菱山字寺沢（宮宕山中腹）
調 査：踏査（1990）
備 考：三光寺の前身

No 40：三光寺（さんこうじ）
所在地：東山梨郡勝沼町菱山字二本地蔵
創 立：推古天皇3年（595）秦川（河）勝の建立で三岳寺と号した［寺記］、和銅年間（708～715）に三光寺と改める［勝沼町誌］
仏 像：養老3年（719）天正天皇から不動明王が下賜され勅願所となる。その明王像は元慶4年（880）に今の大滝沢へ移された（大滝不動尊）［寺記］
調 査：踏査（1990）
文 献：「甲斐国志」巻之75佛寺部第3、「甲斐国社記・寺記」巻4、「勝沼町誌」1962、「勝沼町史料集成」1973
備 考：当寺はもと寺沢にあり、康永元年（1342）に現在地へ移転。境内から「天平二年（730）三月二日」銘のある磬が出土している［勝沼町誌］。

No 41：真光寺（しんこうじ）
所在地：東山梨郡勝沼町山字上野
調　査：踏査（1990）
文　献：『甲斐国社記・寺記』巻4、『甲斐国志』巻之75佛寺部第3、『勝沼町誌』1962
備　考：聖徳太子伝説をもつ天台宗の霊場であったという［勝沼町誌］

No 42：仙光寺（せんこうじ）
所在地：東山梨郡勝沼町等々力宮ノ脇
創　立：推古天皇6年（598）二本杉と称する所に一宇を建立［勝沼町誌］
調　査：踏査（1990）
文　献：『勝沼町誌』1962
備　考：弘仁2年（811）諏訪之原に真栄が一宇を建立し、天台宗に改める。永禄年間甲越戦端を開くにあたり、宮ノ脇に寺を移した。

No 43：大善寺〔柏尾寺・柏尾山寺〕（だいぜんじ・かしおじ・かしおさんじ）
所在地：東山梨郡勝沼町勝沼字道上
創　立：養老2年（718）行基が開創［国志］、戦国期には天平4年創立説あり
仏　像：本尊の薬師如来像および両脇侍像・日光菩薩立像・月光菩薩立像は一木造りの平安前期の作（国重文）
布目瓦：丸瓦・平瓦、白鳳期の平瓦（表面採集）
調　査：試掘（1993.12.13～21）　本書第2章参照
文　献：『甲斐国志』巻之75佛寺部第3、『甲斐国社記・寺記』巻2、『勝沼町誌』1962
備　考：康和5年（1103）銘の経筒には「柏尾山寺往生院」とある。

No 44：福泉寺址（ふくせんじし）
所在地：東山梨郡勝沼町菱山庄屋敷
創　立：寛治7年（1093）等々力南謡に一宇を建立し、後に之を寺とした［国志］
調　査：踏査（1990）
文　献：『甲斐国志』巻之75佛寺部第3、『勝沼町誌』1962

No 45：不動寺（ふどうじ）
所在地：東山梨郡勝沼町中原（旧牛奥村）
創　立：元慶3年（879）［三光寺記には元慶4年（880）とあり］三岳寺住職金界坊阿闍梨が大滝山中に建立［勝沼町誌］
調　査：踏査（1990）
文　献：『勝沼町誌』1962
備　考：後に中原に移転する。

No 46：万福寺（まんぷくじ）
所在地：東山梨郡勝沼町等々力
創　立：推古天皇12年（604）益識法師と国司秦河勝により開かれた［勝沼町誌］
調　査：踏査（1990）
文　献：『甲斐国志』巻之75佛寺部第3、『甲斐国社記・寺記』巻4、『勝沼町誌』 1962
備　考：馬蹄石（駒塚）ともいう聖徳太子伝説をもつ石あり［勝沼町誌］

No 47：絵見堂址（えみどうし）
所在地：東山梨郡勝沼町等々力
調　査：踏査（1990）
備　考：巨摩郡武川に天眼寺あり、之を移して絵見観音を祀る［勝沼町誌］

No 48：山之神遺跡（やまのかみいせき）
所在地：東山梨郡勝沼町
布目瓦：寺本廃寺と同笵の素弁八葉蓮華文軒丸瓦

No 49：立正寺（りっしょうじ）
所在地：東山梨郡勝沼町休息
創　立：大宝2年（702）役の小角が創立［勝沼町誌］
調　査：踏査（1990）
文　献：『甲斐国志』巻之75佛寺部第3、『勝沼町誌』1962
備　考：はじめ地蔵寺と称すが、長和4年（1015）に胎蔵寺、建治2年（1276）に立正安国寺と改称［勝沼町誌］

No 50：観音寺（かんのんじ）
所在地：東八代郡石和町市部
創　立：未詳［国志］
文　献：『甲斐国社記・寺記』巻2、『甲斐国志』巻之76佛寺部第4

No 51：清光院（せいこういん）
所在地：東八代郡石和町（小石和郷）
創　立：逸見清光（1199年没）が創建［国志］
文　献：『甲斐国志』巻之82佛寺部第10
備　考：信玄によって甲府市岩窪町の現在地に移され円光院と改称された［国志］

No 52：大蔵経寺〔大蔵寺・青獅子山松本寺〕（だいぞうきょうじ）
所在地：東八代郡石和町松本
創　立：養老6年（722）に行基が開く［寺記］
調　査：踏査（1990）
文　献：『甲斐国志』巻之74佛寺部第2、『甲斐国社記・寺記』巻2
備　考：当初は松本寺と称したが応永4年中興し現寺名に改称［国志］

No 53：松本塚ノ越遺跡　（まつもとつかのこしいせき）
所在地：東八代郡石和町松本
布目瓦：平瓦（奈良時代、甲斐国分寺の瓦と近似）
調　査：発掘（1990）
文　献：『松本塚ノ越遺跡』石和町教育委員会　1991

No 54：姥塚遺跡（うばづかいせき）
所在地：東八代郡御坂町井之上
調　査：発掘（1980・1981）
文　献：『姥塚・姥塚無名墳』山梨県埋蔵文化財センター　第24集　1987、瀬田正明　1992
備　考：腰帯具［銅製巡方（16号住）］

No 55：大野寺〔福光園寺〕（おおのじ・ふくこうおんじ）
所在地：東八代郡御坂町大野寺
創　立：未詳、保元年間（1157～1159）再興［国志］
仏　像：木造香王観音立像（藤原期の一木造り）
文　献：『甲斐国志』巻之77佛寺部第5・巻之41古蹟部第4
備　考：天正2年に現在の福光園寺に改称

No 56：半行寺遺跡（はんぎょうじいせき）
所在地：東八代郡御坂町成田字半行寺
布目瓦：平瓦・丸瓦
調　査：試掘（1993.12.22～27）本書第2章参照
文　献：『年報』10　山梨県埋蔵文化財センター　1994

No 57：方八丁〔国衙推定地〕（ほうはっちょう）
所在地：東八代郡御坂町金川原字方八丁
調　査：踏査（1990）

No 58：横畑遺跡〔国衙推定地〕（よこばたけいせき）
所在地：東八代郡御坂町成田字南畑
調　査：試掘（1994.11.21～12.8）本書第2章参照
文　献：『年報』11　山梨県埋蔵文化財センター　1995
備　考：腰帯具［石製丸鞆］、御坂町国衙字堀之内・宮本に隣接

No 59：大原遺跡（おおはらいせき）
所在地：東八代郡一宮町大原・南権現堂
布目瓦：あり
調　査：発掘（1989）
文　献：『大原遺跡発掘調査概報』一宮町遺跡調査会・教育委員会　1990
備　考：灰釉陶器製の浄瓶、銅銃、腰帯具［石製巡方2（21号住、A8-B20）、石製丸鞆（E59号住）、石製鉈尾（W30号住）、銅製鉈尾］、硯

No 60：甲斐国分寺跡（かいこくぶんじあと）
所在地：東八代郡一宮町国分
創　立：天平13年（741）国分寺建立の詔
布目瓦：軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・道具瓦、川田瓦窯跡・上土器瓦窯跡から供給
調　査：発掘（1983～1987）
文　献：『甲斐国志』巻之40古蹟部第3・巻之76佛寺部第4、『甲斐国社記・寺記』巻2、『甲斐国分寺跡』一宮町教育委員会　1990
備　考：1922年国史跡指定

No 61：甲斐国分尼寺跡（かいこくぶんにじあと）
所在地：東八代郡一宮町東原
創　立：天平13年（741）国分寺建立の詔
布目瓦：軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦
調　査：踏査（1990）、発掘（1990・1994）
文　献：『一宮町誌』1967、「甲斐国分尼寺遺跡」猪股喜彦　『1990年度下半期　遺跡調査発表会旨』山梨県埋蔵文化財センター　1991、『甲斐国分尼寺跡現地説明会』一宮町教育委員会1994、「甲斐国分尼寺跡現況図」は瀬田正明氏提供（1995作成）
備　考：1949年国分尼寺跡と認定され国史跡指定、腰帯具［銅製巡方（3-17号住）］

No 62：楽音寺（がくおんじ）
所在地：東八代郡一宮町塩田
創　立：推古天皇2（594）開創［寺記］、天平10年（738）行基が彫刻安置して寺基を確立した［寺記］
調　査：踏査（1990）
文　献：『甲斐国志』巻之76佛寺部第4、『甲斐国社記・寺記』巻2、『一宮町誌』1967

No 63：車地蔵遺跡（くるまじぞういせき）
所在地：東八代郡一宮町末木
布目瓦：あり

No 64：慈眼寺（じげんじ）
所在地：東八代郡一宮町末木
創　立：不詳、文治年間（1185～1190）に宥日上人が中興［寺記］
仏　像：木造薬師如来坐像・地蔵菩薩像・十二神将像・神像（藤原期、県文化財）
文　献：『甲斐国志』巻之76佛寺部第4、『甲斐国社記・寺記』巻2、『一宮町誌』1967
備　考：［国志］によると、宥日上人の没年を文明2年（1470）としている。

No 65：地蔵寺（じぞうじ）
所在地：東八代郡一宮町西田（旧地蔵堂村）
創　立：地蔵尊は聖徳太子の作［国志］
文　献：『甲斐国志』巻之76佛寺部第4、『甲斐国社記・寺記』巻2、『一宮町誌』1967

No 66：釈迦堂遺跡群〔野呂原遺跡〕（しゃかどういせきぐん〔のろはらいせき〕）
所在地：東八代郡一宮町野呂原（飛び地）
文　献：『釈迦堂』」　山梨県埋蔵文化財センター

調査報告第22集　1987
備　考：腰帯具［銅製巡方］・鉄製紡錘車・鉄製鏃・隆平永宝（14号住）

No 67：千米寺廃寺〔千平寺、千平地、銭米寺〕（せんべいじはいじ）
所在地：東八代郡一宮町千米寺
文　献：「甲斐国志」巻之5　村里部第3
備　考：千米寺の廃跡あり、これに因り村名を得る［国志］

No 68：大積寺跡（たいしゃくじあと）
所在地：東八代郡一宮町土塚
布目瓦：軒平瓦・丸瓦・平瓦
調　査：試掘（1991.11.20～12.13）本書第2章参照
文　献：「甲斐国志」巻之40古蹟寺部第3、「一宮町誌」1967、「年報」8　山梨県埋蔵文化財センター　1992

No 69：筑前原塁跡（ちくぜんばらるいせき）
所在地：東八代郡一宮町大字東原
布目瓦：平瓦
調　査：踏査（1990）、発掘（1983）
文　献：「筑前原塁跡発掘調査概報」一宮町教育委員会 1983
備　考：土塁の構築時期は10世紀後半以降

No 70：東泉寺址（とうせんじし）
所在地：東八代郡一宮町千米寺
布目瓦：表採
調　査：踏査（1990）
文　献：「甲斐国志」巻之40古蹟寺部第3

No 71：桜畑遺跡（さくらばたけいせき）
所在地：東八代郡一宮町東原（勝沼バイパスNo313）
調　査：発掘（1973）
文　献：「古代甲斐国の考古学調査」山梨県教育委員会　1974
備　考：腰帯具［金属製鉈尾（3号住）］

No 72：松原遺跡（まつばらいせき）
所在地：東八代郡一宮町末木
布目瓦：あり

No 73：豆塚遺跡（まめづかいせき）
所在地：東八代郡一宮町末木
布目瓦：宇瓦・丸瓦・平瓦、格子目叩痕や畳表状圧痕をもつものあり
文　献：「豆塚遺跡・東新居遺跡」山梨県埋蔵文化財センター報告第4集　1984

No 74：満願寺址（まんがんじし）
所在地：東八代郡一宮町竹原田
仏　像：木造十一面観音立像（平安後期、県文化財）は行基の作［国志］
調　査：踏査（1991）
文　献：「甲斐国志」巻之76佛寺部第4、「甲斐国社記・寺記」巻3、「一宮町誌」1967

No 75：矢倉遺跡（やくらいせき）
所在地：東八代郡一宮町東原
布目瓦：あり

No 76：竜の木遺跡（りゅうのきいせき）
所在地：東八代郡一宮町末木
文　献：瀬田正明（1992）
備　考：腰帯具［石製巡方（1号住）］

No 77：両の木神社遺跡（りょうのきじんじゃいせき）
所在地：東八代郡一宮町末木
布目瓦：丸瓦
文　献：「下長崎遺跡・両の木神社遺跡」山梨県埋蔵文化財センター報告第44集　1989

No 78：久保遺跡（くぼいせき）
所在地：東八代郡八代町北字久保
布目瓦：素弁8葉蓮華文軒丸瓦・平瓦
調　査：踏査（1990）久保B遺跡
文　献：「八代町誌」1975

No 79：建久寺址〔建境寺・見京地〕（けんきゅうじし・けんきょうじ）
所在地：東八代郡八代町奈良原
調　査：踏査（1990）
文　献：「甲斐国志」巻之41古蹟部第4、「八代町誌」巻下 1976、「東八代郡誌」1979
備　考：貞永年間（1232～1233）に、野高山建久寺と称するものあり［東八代郡誌］

No 80：広済寺（こうさいじ）
所在地：東八代郡八代町奈良原
創　立：康応年間（1389～1390）［寺記］
調　査：踏査（1990）
文　献：「甲斐国社記・寺記」巻2

No 81：町屋遺跡〔御所遺跡〕（まちやいせき・ごしょいせき）
所在地：東八代郡八代町米倉
布目瓦：あり
調　査：踏査（1990）

No 82：みそっかす山（みそっかすやま）
所在地：東八代郡八代町竹居大口山開拓
調　査：踏査（1990）
備　考：古代寺院伝承地

No 83：妙善寺址（みょうぜんじし）
所在地：東八代郡八代町岡字妙善屋敷
調　査：踏査（1990）
備　考：古代寺院伝承地

No 84：瑜伽寺（ゆがじ）
所在地：東八代郡八代町永井
創　立：霊亀元年（715）に無音律師が創建［国志］
仏　像：塑像断片の薬師如来は昭和18年に東京国立博物館に移された
布目瓦：軒平瓦・丸瓦・平瓦
調　査：試掘（1992.11.11～18）本書第2章参照
文　献：「甲斐国志」巻之77佛寺部第5　巻之44古蹟部第4、「甲斐国社記・寺記」巻2、「八代町誌」巻下　1976、「年報」9　山梨県埋蔵文化財センター　1993
備　考：伝承にいう国宗寺とは建久寺よりはむしろ瑜伽寺をいうのではないか［八代町誌］

No 85：米倉遺跡（よねぐらいせき）
所在地：東八代郡八代町米倉字御所
布目瓦：あり
文　献：「八代町誌」1975

No 86：竜安寺〔真福寺〕（りゅうあんじ）
所在地：東八代郡八代町米倉金山
創　立：治安元年（1021）開基し真福寺と号す［国志］、真福寺は堂宇とともに焼失し、金山に移り竜安寺と改称［八代町誌］
文　献：「甲斐国志」巻之77佛寺部第5、「甲斐国社記・寺記」巻3、「八代町誌」巻下 1976

No 87：聖応寺（しょうおうじ）
所在地：東八代郡境川村大黒坂
創　立：康暦元年（1379）
調　査：踏査（1990）
文　献：「甲斐国志」巻之77佛寺部第5、「甲斐国社記・寺記」巻2

No 88：常楽寺（じょうらくじ）
所在地：東八代郡境川村藤垈
調　査：踏査（1990）
文　献：「甲斐国志」巻之80佛寺部第8
備　考：本尊正観音は行基の作［国志］

No 89：大石寺（たいしゃくじ）
所在地：東八代郡境川村石橋
調　査：踏査（1990）
文　献：「甲斐国志」巻之95人物部第4、「甲斐国社記・寺記」巻4

No 90：智光寺（ちこうじ）
所在地：東八代郡境川村藤垈
創　立：天喜年間（1053～1058）［東八代郡誌］
仏　像：虚空蔵菩薩像（県文化財）は同村大窪の朝霧から現在地に移したという［東八代郡誌］。
調　査：踏査（1990）
文　献：「甲斐国志」巻之80佛寺部第8、「甲斐国社記・寺記」巻3、「東八代郡誌」1979

No 91：温湯遺跡（ぬくゆいせき）
所在地：東八代郡境川村大窪字温湯
布目瓦：完形品の丸瓦が出土
調　査：試掘（1992.11.5～10）本書第2章参照
文　献：「境川村誌　資料編」1990、「年報」9　山梨県埋蔵文化財センター　1993

No 92：法花寺（ほっけじ）
所在地：東八代郡境川村大黒坂法華寺
調　査：踏査（1990）
備　考：古代寺院伝承地

No 93：室屋遺跡（むろやいせき）
所在地：東八代郡境川村藤垈
布目瓦：宝相華唐草文軒平瓦・平瓦［ムシロ状圧痕もつものあり（伝出土）］
文　献：「境川村誌　資料編」1990
備　考：瓦窯跡か

No 94：稲荷塚古墳（いなりづかこふん）
所在地：東八代郡中道町下向山字東山
文　献：「稲荷塚古墳」山梨県埋蔵文化財センター報告第38集　1988
備　考：銅鋺（石室内部から）

No 95：円楽寺（えんらくじ）
所在地：東八代郡中道町右左口字七覚
創　立：大宝元年（701）役小角が開創［国志］
仏　像：役行者像［延慶2年（1309）の修造銘あり］と二鬼像は鎌倉初頭の作、現存中で国内最古
布目瓦：表面採集のみ
調　査：試掘（1994.11.10～12.8）本書第2章参照、
文　献：「甲斐国志」巻之80佛寺部第8、「甲斐国社記・寺記」巻2、「年報」11　山梨県埋蔵文化財センター　1995　「中道町円楽寺役行者像」西川新次　「甲斐中世史と仏教美術」植松又次先生頌寿記念論文集　1994

No 96：旧心経寺址（きゅうしんぎょうじし）
所在地：東八代郡中道町心経寺字上原

No 97：心経寺横手遺跡（しんぎょうじよこていせき）
所在地：東八代郡中道町心経寺字横手
創　立：心経寺は不詳、安国寺は暦応2年（1339）創建［国志］
布目瓦：平瓦・丸瓦
調　査：試掘（1994.1.10～11）本書第2章参照
文　献：「甲斐国志」巻之42古蹟部第5・巻之80佛

寺部第8、『年報』10　山梨県埋蔵文化財センター　1994
備　考：心経寺が安国寺の前身寺院として存在した、またこの心経寺と安国寺が一時併存したともされる［国志］

No. 98：竜華院〔大祥寺〕（りゅうげいん・だいしょうじ）
所在地：東八代郡中道町上曽根
創　立：大同元年（806）空海により開創［国志］
文　献：『甲斐国志』巻之80佛寺部第8、『甲斐国社記・寺記』巻3
備　考：もとは境川村にあり、暦応元年（1338）現在地に移り大祥寺と改称［国志］

No. 99：大福寺（だいふくじ）
所在地：東八代郡豊富村大鳥居
創　立：天平11年（739）［寺記］
調　査：踏査（1990）
文　献：『甲斐国志』巻之80佛寺部第8、『甲斐国社記・寺記』巻2

No 100：法久寺（ほうきゅうじ）
所在地：東八代郡豊富村高部
創　立：開基は浅利与市義成［承久3年（1221）没］［国志］
文　献：『甲斐国志』巻之80佛寺部第8、『甲斐国社記・寺記』巻3

No 101：永泰寺（えいたいじ）
所在地：西八代郡上九一色村古関
創　立：東大寺の僧奝然が当寺背後の山頂に釈迦像を安置したことに始まる［国志］
仏　像：木造釈迦如来立像（清涼式釈迦如像、県文化財）
文　献：『甲斐国志』巻之80佛寺部第8、『甲斐国社記・寺記』巻2、『上九一色村誌』1985

No 102：光勝寺（こうしょうじ）
所在地：西八代郡三珠町上野
創　立：草創知れず、承久年間（1219～1222）より住持の牌九代あり［国志］、承久2年（1220）の開基［寺記］
調　査：踏査（1990）
文　献：『甲斐国志』巻之86佛寺部第14、『甲斐国社記・寺記』巻2

No 103：不動寺（ふどうじ）
所在地：西八代郡三珠町
創　立：空海が開山［国志］
調　査：踏査（1990）
文　献：『甲斐国志』巻之85佛寺部第13

No 104：薬王寺（やくおうじ）
所在地：西八代郡三珠町上野
創　立：未詳、開基は尊澄［国志］、天平18年（746）行基が霊場として開く［寺記］
調　査：踏査（1990）
文　献：『甲斐国志』巻之86佛寺部第14、『甲斐国社記・寺記』巻2

No 105：源昌寺（げんしょうじ）
所在地：西八代郡市川大門町印沢
調　査：踏査（1991）
文　献：『甲斐国志』巻之86佛寺部第14、『甲斐国社記・寺記』巻3

No 106：平塩寺址〔白雲寺〕（へいえんじし）
所在地：西八代郡市川大門町平塩岡
創　立：貞観7年（865）［国志］、天平7年（735）に行基が開創［市川大門町誌］
調　査：踏査（1990）
文　献：『甲斐国志』巻之50古蹟部第13、『甲斐国社記・寺記』巻2、『市川大門町誌』1967

No 107：宝寿院（ほうじゅいん）
所在地：西八代郡市川大門町平塩岡寺
創　立：勝宝7年（755）［寺記］
文　献：『甲斐国志』巻之86佛寺部第14、『甲斐国社記・寺記』巻2
備　考：平塩寺の子院天台百坊の1つとされる

No 108：宝聚寺（ほうじゅじ）
所在地：西八代郡市川大門町
創　立：承和3年（836）快暹法印が開山［国志］
調　査：踏査（1991）
文　献：『甲斐国志』巻之86佛寺部第14

No 109：慈観寺（じかんじ）
所在地：西八代郡下部町道
創　立：天平勝宝年間（749～757）行基が開創［国志］、神亀5年（728）［寺記］
調　査：踏査（1990）
文　献：『甲斐国志』巻之88佛寺部第16、『甲斐国社記・寺記』巻3

No 110：妙円寺址（みょうえんじし）
所在地：西八代郡下部町市之瀬字坊平
創　立：建治3年（1277）興立［国志］
調　査：踏査（1990）
文　献：『甲斐国志』巻之88佛寺部第16

No 111：権現堂遺跡（ごんげんどういせき）
所在地：南巨摩郡増穂町大字春米字南山
調　査：踏査（1990）、発掘（1975～78）
文　献：『権現堂遺跡』増穂町教育委員会　1989
備　考：多量の泥塔、泥塔焼成遺構2基

No 112：最勝寺（さいしょうじ）
所在地：南巨摩郡増穂町最勝寺
創　立：聖武天皇の勅願で西大寺の忍正が開創［国志］
調　査：踏査（1990）
文　献：『甲斐国志』巻之85佛寺部第13、『甲斐国社記・寺記』巻2
備　考：忍正は鎌倉末期の真言律宗僧の忍性のことであろうか。

No 113：鷹尾寺址（たかおじし）
所在地：南巨摩郡増穂町平林
創　立：宝亀年間（770～781）［国志］
調　査：踏査（1990）
文　献：『甲斐国志』巻之85佛寺部第13
備　考：明治維新後の神仏分離で寺号は廃され氷室神社となった

No 114：明王寺（みょうおうじ）
所在地：南巨摩郡増穂町春米
創　立：宝亀年間（770～781）［国志］
仏　像：木造薬師如来立像（檜の一木造り、平安後期、国重文）。
調　査：踏査（1990）
文　献：『甲斐国志』巻之85佛寺部第13、『甲斐国社記・寺記』巻2、『増穂町誌』1976

No 115：大聖寺（だいしょうじ）
所在地：南巨摩郡中富町八日市場
創　立：承安元年（1171）［寺記］
仏　像：木造不動明王坐像（国重文）
調　査：踏査（1990）
文　献：『甲斐国社記・寺記』巻2、『中富町誌』1971

No 116：常説寺（円乗寺・萩寺）（じょうせつじ）
所在地：中巨摩郡敷島町吉沢
創　立：弘仁14年頃（832）円乗寺と称した［寺記］
文　献：『甲斐国志』巻之81佛寺部第9、『甲斐国社記・寺記』巻4
備　考：文永年間（1264～1275）に常説寺と改めた。通称は萩寺

No 117：天狗沢瓦窯跡（てんぐざわがようせき）
所在地：中巨摩郡敷島町天狗沢字北川
布目瓦：軒丸瓦・平瓦・丸瓦
調　査：発掘（1986・1987・1988）、踏査（1990）
文　献：『山梨県生産遺跡分布調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター報告第51集　1990、『天狗沢瓦窯跡発掘調査報告書』敷島町教育委員会　1990
備　考：白鳳時代の瓦窯跡

No 118：松ノ尾遺跡（まつのおいせき）
所在地：中巨摩郡敷島町中下条
仏　像：銅製阿弥陀如来坐像2点（写真の1点は住居跡内出土、高さ5.7cm、重さ90g、11世紀の作。もう1点は詳細不明）
調　査：発掘（1995）敷島町教育委員会

松ノ尾遺跡出土の銅製阿弥陀如来坐像

No 119：峰観音堂（みねのかんのんどう）
所在地：中巨摩郡敷島町牛句
創　立：弘仁年間（810～824）に空海が創立［国志］
文　献：『甲斐国志』巻之81佛寺部第9、『敷島町誌』1966

No 120：薬師寺（やくしじ）
所在地：中巨摩郡敷島町
調　査：踏査（1990）
文　献：『甲斐国志』巻之81佛寺部第9、『甲斐国社記・寺記』巻3

No 121：長谷寺（ちょうこくじ）
所在地：中巨摩郡八田村榎原
創　立：天平年間（729～749）に行基が建立［国志］
調　査：踏査（1990）
文　献：『甲斐国志』巻之85佛寺部第13、『甲斐国社記・寺記』巻2

No 122：慈眼寺（じげんじ）
所在地：中巨摩郡白根町上今諏訪
仏　像：薬師如来坐像・十二神像・神像・地蔵菩薩像（藤原期、県文化財）
調　査：踏査（1991）
文　献：『甲斐国志』巻之85佛寺部第13、『甲斐国社記・寺記』巻3

No 123：諏訪神社（すわじんじゃ）
所在地：中巨摩郡白根町上今諏訪
仏　像：木造菩薩形立像（藤原期、県文化財）隣接する慈眼寺仏像群の一体か

No 124：善応寺（ぜんのうじ）
所在地：中巨摩郡白根町大嵐
創　立：鎌倉時代、古くは真言宗寺院と推定される［白根町誌］
仏　像：千手観音像（一木造、藤原期、八田村の長谷寺十一面観音像と兄弟仏という）
文　献：『甲斐国志』巻之84佛寺部第12、『甲斐国社記・寺記』巻2、『白根町誌』1969
備　考：裏山から平安期の土製経筒が出土

No 125：法善寺（ほうぜんじ）
所在地：中巨摩郡若草町加賀美
創　立：引仁13年（882）空海が開創した［国志］
調　査：踏査（1990）
文　献：『甲斐国志』巻之85佛寺部第13、『若草町誌』1990
備　考：当初は櫛形町山寺あるいは若草町寺部にあったと言われる。大同元年（806）神然が逸見の地に開いた永禅寺という寺院が前身であるとも伝える。その後廃絶し、建久年間（1192～1199）に再建し加賀美寺と称す［国志］

No 126：宝珠寺（ほうじゅじ）
所在地：中巨摩郡櫛形町山寺
仏　像：木造五智如来・脇侍坐像（藤原期、県文化財）
調　査：踏査（1991）
文　献：『甲斐国志』巻之85佛寺部第13、『甲斐国社記・寺記』巻3

No 127：西光寺址（さいこうじし）
所在地：中巨摩郡甲西町鮎沢
創　立：神亀2年（725）に行基が開創［国志］
調　査：踏査（1990）
文　献：『甲斐国志』巻之85佛寺部第13
備　考：たび重なる災害によりすべての建物と本尊を失う。

No 128：深向院〔信光寺〕（しんこういん）
所在地：中巨摩郡甲西町宮沢
創　立：天長年間（824～833）に空海が草創［国志］
調　査：踏査（1990）
文　献：『甲斐国志』巻之85佛寺部第13
備　考：武田五郎信光が再興し信光寺と称す、さらに室町初期に深向院と改称［国志］

No 129：古長禅寺（こちょうぜんじ）
所在地：中巨摩郡甲西町鮎沢
創　立：正和年間（1312～1317）夢窓国師が開創
調　査：踏査（1990）
文　献：『甲斐国志』巻之85佛寺部第13

No 130：永源寺（えいげんじ）
所在地：中巨摩郡玉穂町下河東
創　立：開基は加藤梵玄、天徳元年（957）と位牌にあるが、永享9年（1473）の間違え［国志］
仏　像：聖観音立像（藤原期、国重文）は末寺の法輪山普明寺（下河東、廃寺）から移されたもの
文　献：『甲斐国志』巻之79佛寺部第7、『甲斐国社記・寺記』巻3

No 131：歓盛院（かんせいいん）
所在地：中巨摩郡玉穂町下三条
創　立：創建は文明年間（1781～1789）［国志］
仏　像：薬師如来坐像（引仁～藤原期、国重文）
文　献：『甲斐国志』巻之79佛寺部第7

No 132：願成寺（がんじょうじ）
所在地：韮崎市神山町鍋山
創　立：宝亀2年（771）草創、武田信義が再興［寺伝］
仏　像：木造阿弥陀如来像・阿弥陀如来両脇侍像（藤原末期より鎌倉初期、国重文）
文　献：『甲斐国志』巻之84佛寺部第12、『甲斐国社記・寺記』巻3

No 133：昌福寺（しょうふくじ）
所在地：韮崎市中田町中条
創　立：未詳、永禄9年再興［韮崎市誌］
仏　像：行基作の伝承をもつ十一面観音立像・梵天立像・伝馬頭観音立像（藤原期、県文化財）
文　献：『甲斐国志』巻之83佛寺部第11、『甲斐国社記・寺記』巻3、『韮崎市誌』1979
備　考：古くは真言宗寺院として創建

No 134：半縄田遺跡（はんなわたいせき）
所在地：韮崎市円野町入戸野
調　査：発掘（1994）韮崎市教育委員会
備　考：2間×3間の掘立柱建物跡、瓦塔片1点

No 135：法雲寺（ほううんじ）
所在地：韮崎市円野町下円井
創　立：養老6年（722）行基小庵を結ぶ［国志］
調　査：踏査（1991）
文　献：『甲斐国志』巻之84佛寺部第12、『甲斐国社記・寺記』巻3

No 136：宝生寺（ほうしょうじ）
所在地：韮崎市旭町上条南割
仏　像：虚空蔵菩薩は行基作［国志］
文　献：『甲斐国志』巻之84佛寺部第12、『甲斐国社記・寺記』巻2

No 137：宮ノ前遺跡（みやのまえいせき）
所在地：韮崎市藤井町駒井字宮ノ前
布目瓦：宮ノ前第2遺跡と同一の瓦片
文　献：『宮ノ前遺跡』韮崎市教育委員会　1992
備　考：141号住から「寺」の刻書文字をもつ坏が出土、腰帯具［銅製鉈尾・石製巡方（287号住）］

No 138：宮ノ前第2遺跡（みやのまえだいにいせき）
所在地：韮崎市藤井町駒井字宮ノ前
布目瓦：平瓦・丸瓦・鬼瓦・熨斗瓦、（軒瓦は含まれず）
文　献：『宮ノ前第2遺跡　北堂地遺跡』韮崎市教育委員会　1991
備　考：集落内寺院1棟（4間×5間の四面廂付建物跡）、瓦塔片15点

No 139：福性院（ふくしょういん）
所在地：北巨摩郡明野村小笠原
創　立：貞観年間（859～876）に円仁が開創［寺記］、長和6年（1017）の古碑の存在を伝える［国志］
調　査：踏査（1990）
文　献：『甲斐国志』巻之83佛寺部第11、『甲斐国社記・寺記』巻2

No 140：海岸寺（かいがんじ）
所在地：北巨摩郡須玉町上津金
仏　像：木造千手観音像（国重文）は昭和初年盗難に遭い所在不明
文　献：『甲斐国志』巻之83佛寺部第11、『甲斐国社記・寺記』巻2
備　考：養老年間（717～724）に行基が開創し、現在地の東2kmの心経寺山の奥に所在したという［寺記］。

No 141：見性寺（けんしょうじ）
所在地：北巨摩郡須玉町江草
創　立：城主江草兵庫助信康が創建
調　査：踏査（1991）
文　献：『甲斐国志』巻之83佛寺部第11、『甲斐国社記・寺記』巻2

No 142：正覚寺（しょうかくじ）
所在地：北巨摩郡須玉町若神子
創　立：大治2年（1127）義清の父新羅三郎義光の位牌所となる［国志］、天永3年（1112）逸見義清が創建［寺記］
調　査：踏査（1990）
文　献：『甲斐国志』巻之83佛寺部第11、『甲斐国社記・寺記』巻3
備　考：創建時は天台宗、村山北割（高根町）の地にあったと言う［国志］

No 143：大小久保遺跡（だいしょうくぼいせき）
所在地：北巨摩郡須玉町若神子字大小久保
布目瓦：丸瓦・平瓦（4軒の住居跡内から）
文　献：『大小久保遺跡』須玉町埋蔵文化財調査報告第1集　1983
備　考：9世紀後半の土師器製作址

No 144：東漸寺（とうぜんじ）
所在地：北巨摩郡須玉町若神子
創　立：推古天皇20年（612）に聖徳太子が創建［国志］
調　査：踏査（1990）
文　献：『甲斐国志』巻之83佛寺部第11、『甲斐国社記・寺記』巻2

No 145：大豆生田遺跡（まみょうだいせき）
所在地：北巨摩郡須玉町大豆生田
布目瓦：平瓦1点
文　献：『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告－北巨摩郡須玉町地内－』山梨県教育委員会　1976
備　考：緑釉陶器17片（唾壺1片を含む）、建物跡と考える列石遺構・配石遺構あり

No 146：竜円寺（りゅうえんじ）
所在地：北巨摩郡須玉町上津金
創　立：延喜18年（918）に相応和尚が開山
文　献：『甲斐国志』巻之83佛寺部第11
備　考：比叡山相応和尚（延喜18年没）が甲州に来たりし事見えず［国志］

No 147：若神子古城址（わかみここじょうし）
所在地：北巨摩郡須玉町若神子
布目瓦：あり

No 148：東久保遺跡（ひがしくぼいせき）
所在地：北巨摩郡高根町村山北割
文　献：『東久保遺跡』高根町教育委員会　1984
備　考：腰帯具［石製巡方（20号住）］

No 149：湯沢遺跡（ゆざわいせき）
所在地：北巨摩郡高根町下黒沢小字湯沢
布目瓦：1点
文　献：雨宮正樹「山梨県湯沢遺跡」『日本考古学年報』36　1986、萩原三雄（1986）
備　考：掘立柱建物跡15棟、竪穴住居跡27軒、柵列、隆平永寳、腰帯具2（巡方他）、官牧役所か

No 150：清光寺〔信立寺〕（せいこうじ）
所在地：北巨摩郡長坂町大八田

創　立：古くは信立寺と号したが正治元年（1199）に清光寺に改称［国志］。
調　査：踏査（1991）
文　献：「甲斐国志」巻之83佛寺部第11、「甲斐国社記・寺記」巻3

No 151：柳坪遺跡（やなぎつぼいせき）
所在地：北巨摩郡長坂町大八田
調　査：発掘（1984）
文　献：「柳坪遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告第13集　1986、「山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―北巨摩郡長坂・明野・韮崎地内」山梨県教育委員会　1975
備　考：腰帯具［鉄製鉸具、石製巡方2、銅製巡方（19号住）］

No 152：妙林寺址（みょうりんじし）
所在地：北巨摩郡長坂町渋沢
創　立：養老4年（720）行基の開創で当初妙蓮院と称した［長坂町誌］
仏　像：木造薬師如来坐像（寄木造、藤原期、県文化財）
調　査：踏査（1991）
文　献：「甲斐国志」巻之83佛寺部第11、「甲斐国社記・寺記」巻3、「長坂町誌」巻下　1990
備　考：もと長坂町塚川寺平にあり、永禄元年（1588）現地に移転する［寺記］

No 153：城下遺跡（じょうしたいせき）
所在地：北巨摩郡大泉村谷戸
調　査：発掘（1981）
文　献：「城下・原田遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告第58集　1990
備　考：腰帯具［石製巡方2（8号住、E-8）・石製丸鞆2（2号住、E-8）］、多量の墨書土器、貞観永宝、掘立柱建物跡7棟

No 154：原田遺跡（はらだいせき）
所在地：北巨摩郡大泉村西井出
調　査：発掘（1981）
文　献：「城下・原田遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告第58集 1990、瀬田正明（1992）
備　考：腰帯具［石製巡方（4号住）］、多量の墨書土器

No 155：尾根遺跡（おねいせき）
所在地：北巨摩郡小淵沢町尾根
布目瓦：平瓦（表面採集）
文　献：藤森栄一「南信濃の古瓦」「信濃」13－9　1961

No 156：前田遺跡（まえだいせき）
所在地：北巨摩郡小淵沢町下笹尾字前田
文　献：「前田」小淵沢町教育委員会　1983、「前田」小淵沢町教育委員会　小淵沢町埋蔵文化財調査報告第3集　1985
備　考：掘立柱建物跡・「寺」？の墨書をもつ土師器坏（平安時代）

No 157：清泰寺（せいたいじ）
所在地：北巨摩郡白州町花水
創　立：大治元年（1126）に新羅三郎義光が開基［寺記］、逸見四郎清泰の開基［国志］
調　査：踏査（1991）
文　献：「甲斐国志」巻之83佛寺部第11、「甲斐国社記・寺記」巻3

No 158：中村遺跡（なかむらいせき）
所在地：北巨摩郡大泉村西井出
調　査：発掘（1991）大泉村教育委員会
文　献：瀬田正明（1992）
備　考：腰帯具［銅製巡方（5号住）］

No 159：宮間田遺跡（みやまだいせき）
所在地：北巨摩郡武川村三吹
調　査：発掘（1990）
文　献：「宮間田遺跡」武川村教育委員会　1988
備　考：腰帯具［銅製巡方（82号住）］「牧」（78号住）をはじめとして多数の墨書土器、竪穴住居跡94軒、掘立柱建物跡45棟、真衣野牧に関連か？

No 160：西念寺（さいねんじ）
所在地：富士吉田市上吉田
創　立：養老3年（719）に行基が開創［国志］
仏　像：木造釈迦如来立像（清涼式釈迦像、県文化財）、十一面観音像（藤原期）
調　査：踏査（1990）
文　献：「甲斐国志」巻之90佛寺部第17下、「甲斐国社記・寺記」巻4
備　考：元亀3年（1572）に旧地古吉田から現在地に移る

No 161：西方寺（さいほうじ）
所在地：富士吉田市小明見
調　査：踏査（1990）
文　献：「甲斐国志」巻之89佛寺部第17上、「甲斐国社記・寺記」巻4

No 162：正福寺（しょうふくじ）
所在地：富士吉田市新倉
創　立：大同2年（807）空海が開基［寺記］
文　献：「甲斐国志」巻之89佛寺部第17上、「甲斐国社記・寺記」巻4

No 163：万年寺（まんねんじ）
所在地：富士吉田市小明見
調　査：踏査（1990）
文　献：「甲斐国志」巻之89佛寺部第17上、「甲斐国社記・寺記」巻4

No 164：法泉寺（ほうせんじ）
所在地：南都留郡秋山村
創　立：寛仁3年（1019）［国志］
文　献：「甲斐国志」巻之90佛寺部第17下

No 165：蓮華寺（れんげじ）
所在地：南都留郡足和田村大嵐
創　立：大同4年（809）空海が創造［国志］
文　献：「甲斐国志」巻之90佛寺部第17下、「甲斐国社記・寺記」巻4

No 166：円通寺址［真蔵院］（えんつうじし）
所在地：大月市賑岡町岩殿
創　立：大同元年（806）行基が創造［国志］
調　査：踏査（1990）
文　献：「甲斐国志」巻之90佛寺部第17下、「甲斐国社記・寺記」巻2
備　考：真蔵院は近世に円通寺から独立したもの、承平3年（933）建立とされる三重塔の礎石と石段あり

No 167：花井寺（かせいじ）
所在地：大月市七保町下和田
創　立：寛和2年（986）［国志］
布目瓦：あり？
調　査：踏査（1991）
文　献：「甲斐国志」巻之90佛寺部第17下

No 168：宝鏡寺（ほうきょうじ）
所在地：大月市七保町林
創　立：大同2年（807）創造と伝えられる［国志］
文　献：「甲斐国志」巻之90佛寺部第17下

No 169：観音堂（かんのんどう）
所在地：北都留郡上野原町大野（大野村）
創　立：真言の道場七堂伽藍にして為朝の建立なり［国志］
文　献：「甲斐国志」巻之75佛寺部第3
備　考：源為朝（1139～1177年）

No 170：西光寺（さいこうじ）
所在地：北都留郡上野原町野田尻
調　査：踏査（1991）
備　考：天長元年（824）銘の古碑所蔵

No 171：新町遺跡（しんまちいせき）
所在地：北都留郡上野原町
布目瓦：平瓦1点
文　献：「藤野町の埋蔵文化財」1987
備　考：藤野町日連杉遺跡出土の平瓦片と関連があろう（櫛原 1992）

No 172：法性寺［道乗寺］（ほうしょうじ）
所在地：北都留郡上野原町鶴島
創　立：当寺の前身は大同年間（806～810）に空海が開いた道乗寺［上野原町誌］
仏　像：木造阿弥陀如来坐像（藤原期、県文化財）
調　査：踏査（1991）
文　献：「甲斐国志」巻之90佛寺部第17下、「甲斐国社記・寺記」巻2、「上野原町誌」　1975

全般的に引用・参照した文献

櫛原功一　1990　「均等唐草文軒平瓦の変遷」「山梨県考古学協会誌」第3号
櫛原功一　1992 a「甲斐国分寺瓦の変遷」「帝京大学山梨文化財研究報告」第4集
櫛原功一　1992 b「平安時代の寺院址」「山梨県考古学協会誌」第5号
坂本美夫　1983　「甲斐の郡（評）郷制」「研究紀要」1　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
坂本美夫　1986　「甲斐国府―その環境と展望―」「研究紀要」1　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
末木　健　1990　「甲斐仏教文化の成立」「研究紀要」5　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
末木　健　1983　「山梨県における平安時代の遺跡について」「日本歴史」第426号
末木　健　1987　「甲斐白鳳時代寺院の一様相」「考古学雑誌」72巻－3号
瀬田正明　1992　「山梨県内出土の腰帯具について」「山梨県考古学協会誌」第5号
萩原三雄　1986　「八ヶ岳南麓における平安集落の展開」「山梨考古学論集」山梨県考古学協会
福田正人　1992　「甲斐国における官衙」「山梨県考古学協会誌」第5号
「角川日本地名大辞典」19　山梨県　1984
「山梨百科事典」1989　山梨日日新聞社

第Ⅳ章　結　　語

本県における古代の官衙や寺院の調査は、国府遺跡や甲斐国分寺・尼寺、寺本廃寺などが旧来より行われ、その伽藍配置や出土遺物の研究がなされてきた。しかし、近年は春日居町の国府周辺の調査や、偶然の発見ではあるが、甲府市川田町の桜井畑遺跡や韮崎市宮の前第２遺跡の小規模な寺院址、または、甲府市の金銅製の小仏像や敷島町の銅製小仏像２体の発見など、重要な関連遺跡が報告されている。このようなときに、官衙・仏教関係遺跡の集大成を行うのは、誠に時宜を得たものと思われる。

平成２年度から開始した「古代官衙・寺院跡詳細分布調査」は、既知の遺跡を含め、古墳時代後期から平安時代の間に造られた官衙と寺院の悉皆調査を行い、遺構・遺物の確認を行う目的で実施されたものである。

官衙に関する研究は、坂本美夫の研究（1987『研究紀要』３）以来進展していないが、1988年度～1992年度までの５年間に春日居町で行われた国府関連遺跡調査は注目すべきものがあった。寺本廃寺の南およそ100ｍの地点から、礎石建物２棟が検出された。礎石の規模も大きく、国府の正倉と見なされる施設である。また、1983年２月には一宮町筑前原墓跡の調査が町教育委員会によって行われている。この遺跡は上野晴朗氏(1967『一宮町誌』)によって国庁関連遺跡又は軍団跡と推定されていた遺跡であるが、発掘調査の結果、10世紀末～11世紀前半の土墓・堀・敷石などを伴った遺構であることが明らかとなった。土師器の年代が近年の研究成果によって若干上る可能性があるとしても、上野氏の説までは困難であるという。この周辺には広範囲に土墓が残っているため、全体的な調査が望まれている。御坂町国衙遺跡の想定中心部の発掘は行われていないが、今回の調査で近くの横畑遺跡を試掘調査した。国衙関連の遺構は発見していないが、当時の役人が使った石製帯飾の破片が発見されている事から、遺跡の内容に対しますます期待感が高まっている。また、一宮町大原遺跡からは「山梨郡玉井郷長」と墨書された土器が発見されているが、郡家の下の郷単位の役所などの発見につながれば素晴らしいことだと思う。

山梨県内での仏教文化遺物として最も古い物には《銅鏡》がある。出土地は春日居町寺の前古墳、同町狐塚古墳、中道町稲荷塚古墳の３カ所である。《銅鏡》は６世紀後半に渡来人鏡師公が伝えた技術と言われ、元来舎利容器・供養仏器として用いられた物であるが、７世紀初頭の後期古墳には珍重すべき什器として副葬されたと考えられる。３点の内２点が春日居町の出土品であるが、７世紀後半に建てられる寺本廃寺の先駆けとも見受けられ、この地の豪族が逸速く新しい文化を吸収しようと努力していたことを窺うことができよう。また、中道町稲荷塚古墳からの出土も、４世紀以降連綿と続いた旧勢力の健在ぶりを示している。

７世紀後半の白鳳時代には春日居町寺本に寺院が建立されている。この跡を寺本廃寺と呼んでいるが、塔の心礎や基壇、溝などが検出され、多量の瓦が発見されている。法起寺式伽藍配置の寺院で、春日居町教育委員会によって発掘調査が行われ、その概要が把握されている。甲府盆地の北西側の敷島町からは、同時期の天狗沢瓦窯跡が発見されている。同時に焼かれた須恵器から、天狗沢瓦窯は７世紀後半でも古い時期に操業されていた事が分かっているから、県下で最古の寺院に使われた瓦という事になる。しかし、残念ながらその寺院の場所が不明である。最近、敷島町松ノ尾遺跡より小型の仏像（阿弥陀如来坐像）が発掘されている。製作年代は11～12世紀頃であるが、天狗沢瓦窯が供給した古代寺院を探す手掛かりになるかもしれない。同じく瓦窯としては甲府市川田瓦窯跡、同上土器瓦窯跡がある。川田瓦窯跡は寺本廃寺へ、上土器瓦窯跡は国分寺などへ瓦を供給した窯跡である。この地域が古代仏教文化に果たした役割は重要だったと思われるが、特筆すべきは1994年１～７月の調査で発見された甲府市横根町東畑遺跡Ｂ地点出土の小金銅仏である。像の様式は観音菩薩立像で像高11.1㎝、製作年代は白鳳時代である。出土は９世紀の住居の覆土中であるが、伝世されたものが廃棄されたのか、寺院の廃絶によってたまたま住居内に流れ込んだのかは明らかではない。

奈良時代の寺院は一宮町国分にある甲斐国分寺（国史跡）と同町東原の国分尼寺（国史跡）が代表的な遺跡である。このほか、韮崎市宮の前遺跡では小さな寺院と瓦塔・布目瓦が発見され、八代町瑜伽寺からも奈良時代の布目瓦や建物配石らしい遺構が発見されている。布目瓦の発見された遺跡は数多く、特に国分寺や尼寺周辺、八代町地内、甲府市の窯跡周辺では一覧表にも掲載できない程である。これらの遺跡が寺院にかかわる遺跡なのかは、今後

の発掘調査に待たなければならないだろう。

平安時代の仏教遺跡は、密教の発展による山岳寺院の増加が特徴としてあげられよう。しかし、奈良時代の国家仏教寺院のように、七堂伽藍を巡らし、金色の甍に輝いた建物というイメージからは程遠く、質素な庵というのが大部分ではなかったろうか。一宮町大積寺跡からは布目瓦や土師器などが出土し、伝承寺院が確認された。境川村大窪の温湯遺跡からは布目瓦が出土するが、かつて山岳寺院があった場所と考えても良い所である。塩山市放光寺の出土布目瓦も、真言宗寺院として寺伝の確かさを伝えるものであろう。春日居町長谷寺からも布目瓦の小さな破片が出土している。この寺院は鎌倉時代になって規模を拡大したようである。勝沼町大善寺の薬師堂は鎌倉時代の建物として国宝に指定されているが、この周辺からも布目瓦の破片が発見されている。

また、山岳寺院だけでなく、集落にも寺院と言えないような小さな庵が建てられたようだ。甲府市桜井畑遺跡からは寺院跡と考えられる建物跡が発掘され、この周辺からは多量の布目瓦も出土している。御坂町成田の半行寺からは多量の布目瓦が採取されたために、1994年1月に試掘調査を行ったところ、やはり布目瓦と土師器が多量に発見された。この遺跡は国衙の北側500mほどに位置しており、国衙との関連も指摘できる遺跡である。山岳寺院以外に村落内にも寺院があちこちの集落に置かれた事は、遺跡だけでなく「寺」と記された墨書土器の出土からも想像できる。また、大豆生田遺跡の緑釉唾壺も仏教関係遺物のひとつである。古代仏教が豪族によって持ち込まれ、やがて国家政策として普及されていったが、平安時代には荘園が発達し、甲斐の村々の多くが荘園に組み込まれたものと思われる。寺院の荘園と村落内寺院が結び付くかは今後の研究材料であろう。

このほか古代寺院の手掛かりの一つに、仏像がある。瑜伽寺の塑像は天平時代の作と伝えられる破片であるが、今回の調査で奈良時代の布目瓦が境内地から出土した事ともあわせて考えると、貴重な資料と言える。そのほか平安時代藤原文化の香り高い仏像が県下には多い。どのような伝世経路をたどったのか調べることによって、古代寺院の存在まで突き止められるかもしれない。

今回の調査は、古代仏教関係遺跡と官衙遺跡調査の第1歩である。官衙や仏教関係の遺跡や遺物への関心が日々高まって来る中で、今日の知識の大部分を網羅できたのではないかと考えているが、まだまだ不十分な部分も多いので、継続した調査を進め、後日更にまとめたものが世に出せればと念じている。これを契機に、県内の仏教文化に対する関心が更に高まり、新たな研究の端緒となれば幸いである。

最後となりましたが、事業を行ってきた5年間には、分布調査や試掘調査で各地の地権者、地元教育委員会の皆様にご協力をいただきました。あまりに多くの方々なので全員のお名前を記すことができませんが、心より御礼を申し上げます。

報告書抄録

ふりがな	やまなしけんこだいかんが・じいんあとしょうきいさんぶんぷちょうさほうこくしょ
書名	山梨県古代官衙・寺院跡詳細分布調査報告書
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター
シリーズ番号	第106集
編著者名	末木 健・村石真澄・高野友明・野代幸和・大谷満水
編集機関	山梨県教育委員会
所在地	〒400-15 山梨県東八代郡中道町下曽根923 TEL 0552-66-3881
発行年月日	西暦1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
長谷寺	山梨県東山梨郡春日居町鎮目3681	19301	—	35度 40分 15秒	138度 38分 00秒	19911120～ 19911129	200	学術調査
大橋寺跡	山梨県東八代郡一宮町土塚字大橋寺1407-16	19323	—	35度 37分 05秒	138度 43分 30秒	19911202～ 19911210	100	
放光寺	山梨県塩山市藤木2438	19203	—	35度 43分 50秒	138度 43分 20秒	1991212～ 19911213	100	
温湯	山梨県東八代郡境川村大黒字温湯	19325	40	35度 34分 32秒	138度 37分 48秒	19921105～ 19921124	45	
瑜伽寺	山梨県東八代郡八代町永井	19324	—	35度 36分 26秒	138度 38分 4秒	1992111～ 1992118	120	
七日子廻寺	山梨県山梨市七日市場・塩山市三日市場	19203 19205	—	35度 42分 27秒	138度 42分 31秒	19921119～ 19921124	38	
大善寺	山梨県東山梨郡勝沼町勝沼字道上	19304	42	35度 39分 15秒	138度 44分 48秒	19931213～ 19931221	70	
半行寺	山梨県東八代郡御坂町成田字半行寺	19322	—	35度 38分 18秒	138度 39分 24秒	19931222～ 19931227	18	
心経寺横手	山梨県東八代郡中道町石左口字七覚4094外	19326	—	35度 34分 17秒	138度 36分 27秒	19940110～ 19940111	12	
円楽寺	山梨県東八代郡御坂町成田字荒畑	19326	—	35度 34分 3秒	138度 35分 6秒	19941110～ 19941114	21	
横畑	山梨県東八代郡御坂町成田字荒畑	19322	2	35度 37分 58秒	138度 37分 30秒	19941121～ 19941208	95	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長谷寺	寺院跡	平安～中世	堂跡2	布目瓦、土師質土器、常滑、瀬戸、擂鉢、灰釉	
大橋寺跡	寺院跡	平安～中世	溝2条	布目瓦、軒丸瓦、土師器、須恵器	
放光寺	寺院跡	平安～中世		布目瓦、土師器、須恵器	
温湯		平安	住居跡	布目瓦、土師器、墨書土器	
瑜伽寺	寺院跡	奈良・平安	石列遺構、住居跡、土坑	布目瓦、土師器、灰釉・緑釉陶器	石列遺構は寺院跡と関連か？
七日子廻寺	寺院跡	平安	配石遺構	布目瓦、土師器	
大善寺	寺院跡	奈良・平安～中世	石段	布目瓦、中世の土師質土器	
半行寺		平安	溝1条（旧河道）	布目瓦、土師器、須恵器、墨書土器	
心経寺横手		平安		土師器	
円楽寺		平安～中世		土師器、須恵器、灰釉陶器、常滑	
横畑		古墳・平安・中世	住居跡、土坑、石組	勝帯具（石製丸鞆）、土師器、須恵器、中世陶器	

1995年3月31日 発行

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第106集
山梨県古代官衙・寺院跡詳細分布調査報告書

編集 山梨県埋蔵文化財センター
山梨県東八代郡中道町下曽根923
TEL 0552-66-3881
発行 山梨県教育委員会
印刷 有限会社新星堂印刷

饒